江戸名所図會

十六

ル 4
5105
16

門ル4
號5105
巻 1516

江戸名所圖會卷之六

神陽之部目録

金龍山浅草寺 観音堂 古墳 三社権現堂 山門 鳥居 護国殿 一柱稲荷社 十社権現社 淫祠河 焼ろ池 瑜伽 随身門 閻魔堂 例幣使舎 二社稲荷不動尊 節分会の所 観世音出現の所 藪内の市場 十二月十八日年の市場 雷神門 石の柱来由 平内左衛門石像 三社権現堂 法華大師護摩壇之舊跡 地蔵菩薩 画家狩谷稲荷社 浅草寺
浅草川
浅草明神社
徳園社 同来由 十王堂
雷神明神社
手向聖舊址
日輪寺
海禅寺
祝言寺
弘法井観音堂
樋寺 浪の所 底の所
浪居八幡宮
西福寺 来由 報恩寺 来法寺
天嶽院
清水寺観世音
長遠寺日蓮大士
三島明神社
大鳥居八幡宮
第六天神社 縁起 稲荷社
浄念寺
報恩寺 開山古多寶
杉住院
上宮太子堂
幡随意院 妙法あり
清水稲荷社 同来由
閻魔堂 奪衣婆 地蔵菩薩
名越里
東漸寺
誓願寺
東光院
除厄太子堂
信州善光寺焼ろ 焼ろ

昭41年12月20日受
原安三郎氏寄贈

永昌寺
東叡山山下の景
養玉院
金松安樂寺
不動堂法印の松
水戸孝龍第宅図源　三河橋
後冨の塚
鮫野檜現社　彼岸詰の景
徐水水陀如来
白雞塚　白雞村耕地塚
石濱
牛頭天王祠　天満宮
廣徳寺
大乘天祠社
長壽圓覺堂
根岸圓光寺
正燈寺　園中楓樹
小塚原天王社
子位大橋　子位村
富士淵同宮
西方弁天法大師堂　大師加持水
梅田明王院　天満宮　不動堂
石濱城跡
下谷稲荷社
常樂院　六阿弥陀　六番目
入谷庚申堂
養論西光寺
百里小路寓居之地
飛鳥明神社　瑞光石
光泉院
淵の淵
法花大明神社
十二天森
八月村八幡宮
誓願明神社　同宮の景
紀日神明宮
思ひ川
下谷岡
上野坂本口圖
小野照崎明神社
時雨岳
水藤郷　稲荷社
山谷熱田明神社
誓願寺　沼田延命寺　六阿弥陀　二番目

隅田川渡
瑞泉寺
鏡ヶ池
東野先生墓
長昌寺
山谷坂今戸橋の景
聖天宮
石濱古戦場
正平合戦之圖
浅草掛松
法源寺
今戸八幡宮
日本堤
水尾不動堂
妙亀塚　妙亀明神社　古墳
玉脇稲荷祠
今戸陶器師
慶養寺
彩吉原町

金龍山浅草寺　傳法院と號す坂東順禮所第十三番目なり天台宗ふ〜て東叡山に屬せり

按るに東鑑に建久三年壬子五月八日法皇四十九日の佛事に百僧供を修せらるゝと其条下に僧元の中俊草寺よりも三口とあり又同書に建長三年辛未三月六日浅草寺(半の如きもの)忽然と出現し奔走の時に寺僧五十口ばかり食堂に集會する所に件の姓異を見て世人立所に病疫を受七人昂虚に死せりとあるよし紀せり寺僧五十口とあるは往古も大伽藍なるよし出たり

本堂　本尊聖觀世音菩薩　世に傳いふ御長一寸八分と志られども古より秘佛ゆ〜

脇士　梵天帝釋　むかさきの一本とつるる紙に四天王　脇壇　右不動明王　左愛染明王　後左右　三十三身像　甚余堂内に諸の佛天を安置す中にも賞頭盧尊者は慈覚大師の作にて霊験いちじるし

額　觀音堂　御拜の大明福州漳郡龍邑徐紹勲筆

額　絶無畏　外陣の家帯　深見玄岱筆

の天井に畫る天人は特野阿春の筆あり

聯　内陣の左右に掲る印　天井の乳あるゝひに内陣天井の鳳凰後壁の二十八部衆筆は特野永真の筆拜殿

山門額　雲竜　紙筆

小石寺の二字を住す筆者孟寛の傳あれども志けき伝ひとゝく〜ふ畧せり

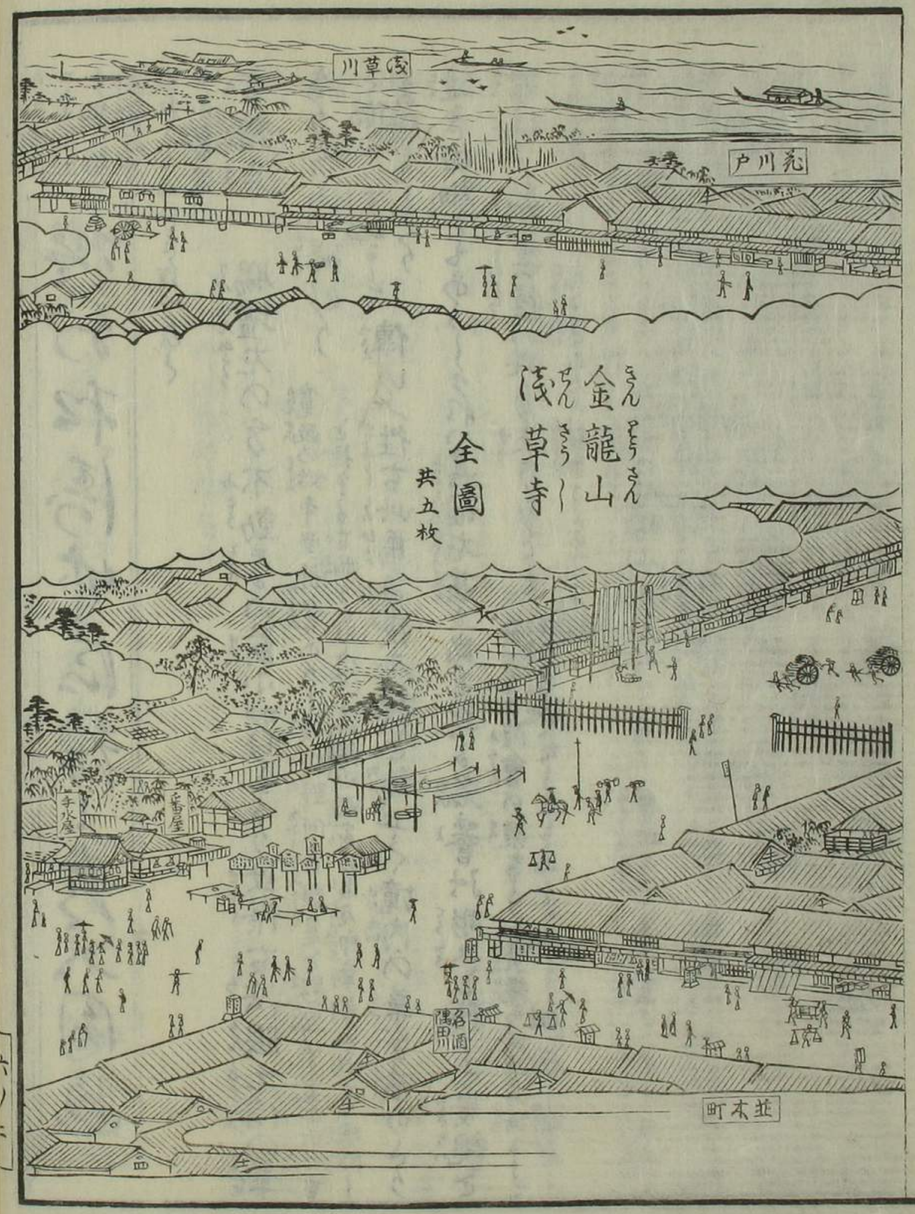
古繪馬

脇壇左の方不動尊の前に掛そり世俗古法眼元信の筆なりといふ誤なり　寛政の始本堂修造あり〜頃狩野何某親是を影写す実に六七百年を経る古物なりかへ〜傍に画家の名及印章等あれども煙滅〜く憤しく既にて傳いふ往古此馬毎夜に額を抜出く境内の草を食あらす近き田畑をもあ〜られい甚須左甚五郎といつる名匠彫刻を頼みて曳縄を書添〜む仍甚後に此寺止りとそ　是古ある附會の説なるべし曳縄も同時の物にて後世書加へたるものなるべ〜と思ふ依て辨〜明る〜されと畫する所の馬に霊ありて板出さるとつるる頃

安誠小伝〜らるといつても其の作とするあり

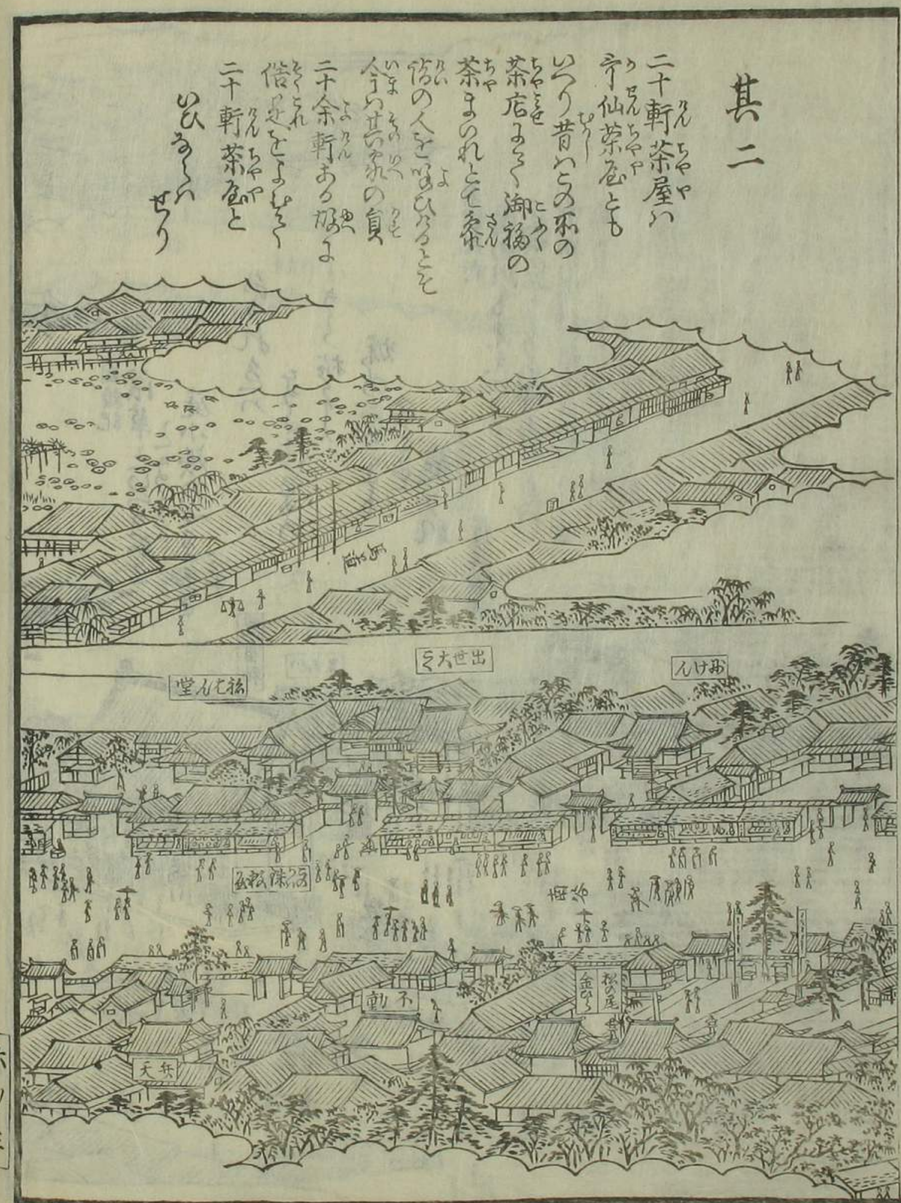
歴代名画記巻第八に云く唐世祖の時楊子華といつる人あり嘗壁上に馬を畫く甚て夜嘶て水草を索る如し〜仍て天下號けて画聖と稱とゝ云ふ又揮塵後録に曰聖宮門の西廡の下に畫く不の人馬〜乳流汗の迹あり慶暦中に一夕人馬の声ありて〜ふ〜つくことれを聚る汗の流るゝあり〜云ふ

元亨釋書に云く昔天王寺の道公紀の紀陳山に翁〜ふ宿せり其夜半猶ほの者あり〜翁〜樹下に〜云く〜云く何と称に進すとすると〜翁〜〜〜〜〜云く〜〜〜〜〜


浅草川
花川戸
金龍山
浅草寺
全圖
共五枚
並木町

田園雜記
浅草といふ所より
庭小歌わる所をこそ
あられたい
なくなる
うゝ桜
蜂の家をも
のことを
庭うれ
東國記行
角田川もえにくるよ
あるのゆうるる桜ありとい
冥東順禮視玄浅草と云
ひとるん立よりて結縁
をべーあるといい
道真淮后
秋ゝ思本未れ花も
あはらさの
露うれそい
角田川うれ
宗牧
天神
秋葉
まちか
風雷神
大神宮

五之集
名の枕
鮒や
いろり
今も
茶屋
其角
錦天満宮
二王門
梅園院

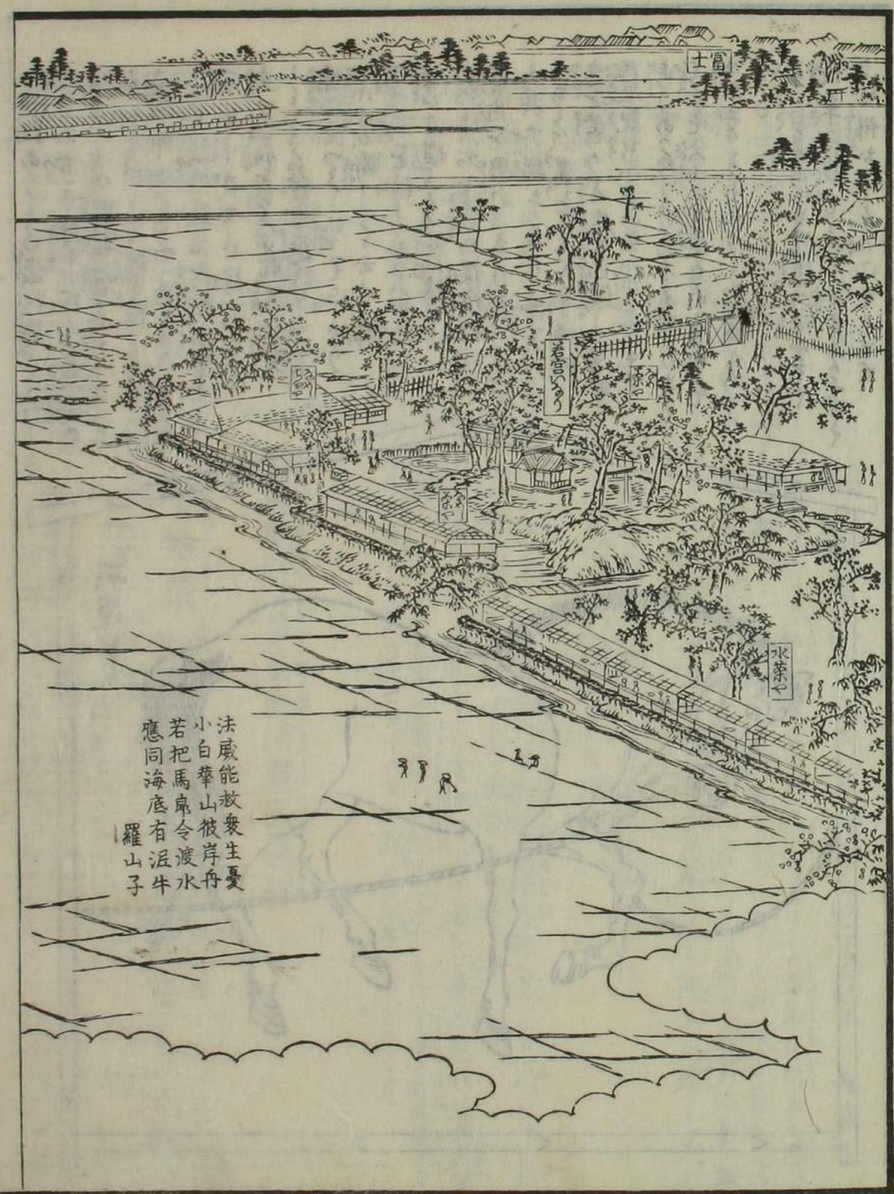

其二
二十軒茶屋は
宇仙茶屋とも
いつり昔いとの糸の
茶店まつく御福の
茶まのれとて糸
彼の人をいまひろとて
今は其の糸の負
二十余軒あるかよ
偽はをまひく
二十軒茶屋と
いひまつり
出世大黒
福七堂
えびす
天神
金ひら

薩身門
二王門

東吉
東谷
五重塔
其三
芝居
本内
手水
傳法院

人丸
元伊勢
十社
笠神明
其四

不動
愛宕
供奉
十社
番
山王


富士
名所めぐり
水茶屋
法威能救衆生憂
小白華山彼岸舟
若把馬鼻令渡水
應同海底有泥牛
羅山子

弓場
弓場
茶の助
土堂
芝居
四阿
碑

其五

小神祠あり其の像杉擇を祈る一行の古さ殺るるかり前足のところその枝破裂せるかり前足の糸をも門く繋神前の神詫をあらうんと しく夜の夜も牧樹下り宿と中夜まさ猪馬のく来て前を宿り出て進く出さり

暁小至つく帰さらり 小原謝く云く師 馬の脚を洗ものこと幸小堪らり問猪の のくそ行と前曰役疫神 管内を巡れるあり

も其お掘そりり出されい りるく曰と受く今師の 恵を蒙り森慶甚深と云 丙辰記り小昔平小牛鬼の出く 走りあり死とる小不圖見出く 見と大士の化現なれるかと 牛い出るそあり かり死とあり

挙白糸つまの道の紀小云く 俄草の観音とく函ゆとりてかく あす佛おまとにい小ちりて

いうなれや狩辺小かり餌小陸草のぬぬむおむ拭たこのとつる 長嘯子

按小挙白集ちとも甚のとあれとうちり越の似たるるを旅ちりまる丙辰記行ゐも馬を大士の化身ありあと辛り此絵る小霊あり く按ゐ事ゐ とも気へ と此繪る昔も人の のと毎 ゐ小や寛永年中観音堂回緑のとと木村市右衛とつる者来り名畫の筆跡 焼ちとんゐを歎き助けゐ ちくく別當智樂院僧正甚志を感 く絵馬の縁ゐ左の 如く記 亟

寛永十九壬午二月十九日炎焼之時武州江戸之住木村市兵衛出く

紅葉狩繪馬 ほ一所小掲そり曾我蛇足九代孫曾我祐叔の筆ゐり

静長刀 本堂の後の方家帯小かけくあり世小義経の妾静御前納る所ありと云伝へくりこれ

山門 樓上小文殊菩薩の像を安亟 横下の左右ゐ金剛力士の像を安亟来由小此巻報恩 後人の作ちり毎年春秋二度の彼岸の中日ゐ正月七月十六日い諸人の賞るるをゐ

浅草寺

五層塔 山門の内右のゐ小あり 内小五智如来を安亟す

轉輪藏 回所小あり一切経を収む前小傳大士ゐ普賢普成の像を安亟此ゐの堂ハ其始妻房守ゐ 雖の建立ゐ今あり所の堂ハ天和年中

隨身門 回所東のゐ小あり豊般若同戸命樹般若同戸命の像を安亟 焼亡の御建立ちり

鐘樓 回所小あり 按ゐ小本ゐ縁起の中小永和に年戊子十二月十三日 伽藍回緑あり小慶元年ゐ三歳の居諸を 送ちとゐくとも小一ちの再興も致さと大元愁吟絶さ所小復行の聖定御ちちりの十方小勸進

額

浅草寺

曼珠院二品良尚法親王真蹟

し愈永小ゐり慶長威誠とあり其ハ銘所記等の書小延慶中安房字孝弘雅観音堂再興のとき
一軀の息障を傳てそくく一樓小ゐるとあるハ永和の田塚小亡ひゐる撞のみゐりて至德に年小ゐり
再び今てある所の洪撞を傳治ヒーとまるべし至德に年ハ永慶と改元の年ちり

日本國武州豊島郡十束郷金龍山浅草寺洪鐘銘
並序

夫鐘者震梵苑之枯禪發驟檀之深省者矣南閻浮
提各以音聲長爲佛事西郡勝地特開樣蕃歟此道
場於是傳法聊持短跪勸發善縁新鑄息乳之鐘永
扣龍澤之月耳根契證者速趨解脱之門庭眼裏聞
聲者則蓮田通之妙果當時若不記者後代誰得識
哉銘曰

末鑄成前　響蒲九天　新鑄成後　福應大千
規摸脱出　當空高懸　輕撞者　墮佛事邊

至德二年丁卯五月初三日　大勧進僧都海慶
小勧進大和國道高
鑄工和泉守經宏

三社大権現社　本堂より艮の方小あり古師臣中知ちくひ小敬人擔前濱成武成等の霊を配て崇
初則當寺の護法神とす世小三処の護法ともつり祇鮮い慈覚大師の作とを當社
ハ俄卒の勅法守ちて祭れい三月十日蒲手小執行あり三社の来由ハ本ゐる縁起の中小詳ちれい
ちり畧と倣の堂ちり荒澤ハ動ゐる歓喜天等を安置す

額　三社大権現　隨喜　樂院一品ゑ遵法親王真蹟　熊谷稲荷の祠　本堂の後の方ちり
ゐる人勧請と来由ハ繁をいとひくちり畧と
内陣小狩聖周信筆の楊安慶の掛繪あり　十社権現祠　同所左の方小あり十人の草刈を拾ちと
ゐり来由ハ本ゐる縁起の条ヤ小つまひらゑ

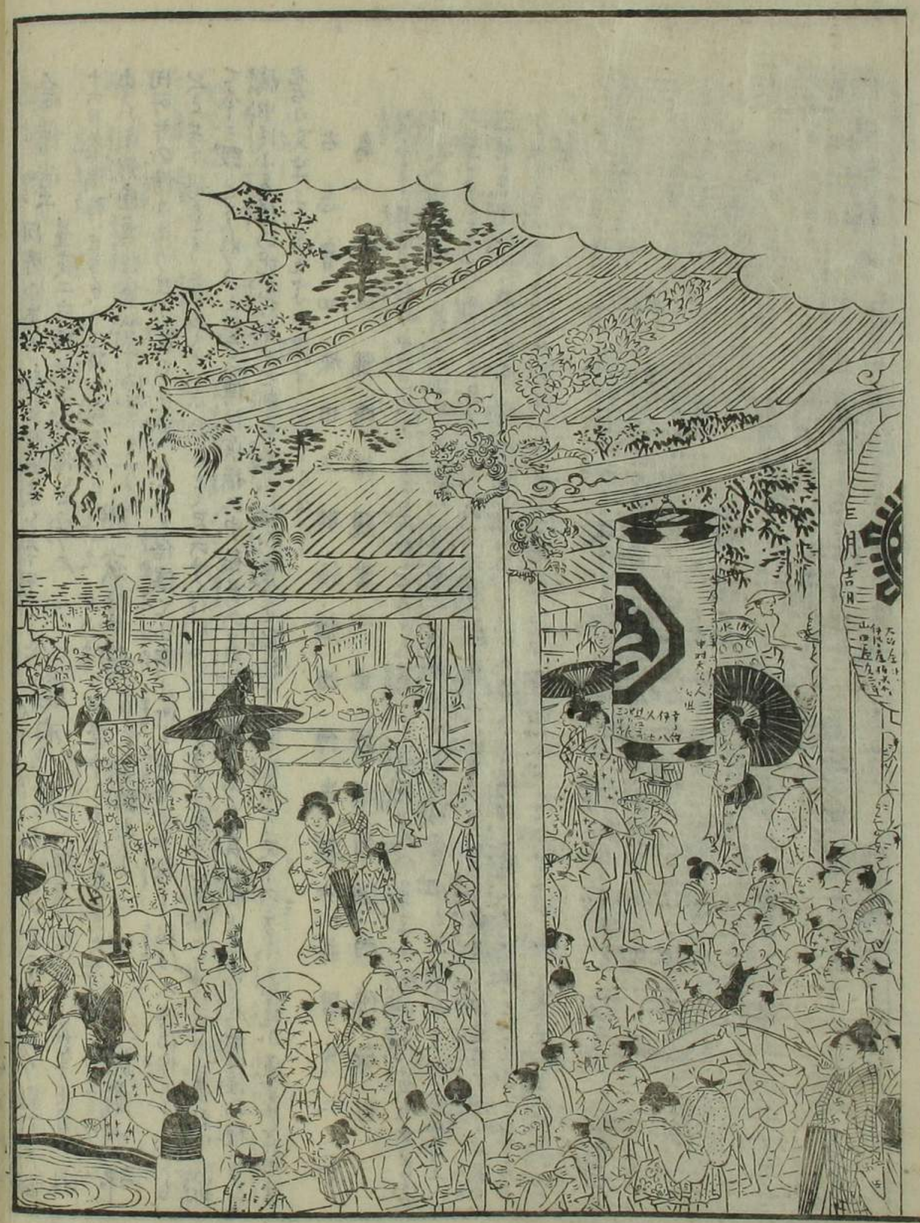
念佛堂　同所小あり阿弥陀如来を安置
昼夜二六時中小念佛を唱ふ
十六日条　衆群とちゐり額小閻王殿と　脱衣婆像　同堂中小あり　慈覚大士の作　尤藏古碑
あり朝鮮國真犯金啓升の筆ちり　あゐて霊驗あり
因所井の傍小あり世小長石尤藏と云又倍濕と小野小所り石塔とも称し　弘法大師の作ちりとも
ゐと共小湿ちり長さ丈余倒さまと尺六寸径厚さ二寸ちりあり寛保二年八月の暴風小吹折
て今三段とちれり上の方小傳法院構の中小稲荷の義祠の傍小あり其形状上小尤尤薩埵の種字を
鴻中ハ小之係の尤尤ゐるを刻と側小洗門是を弱礼す幹相あり又下の方小尤尤小蓮花を挿其
尤右小文字三十有九字を鴻す其文小云く

右志者四殊由三昧
爲一殊四彌西佛先妻女並男女二子
現當二世諸願四満西佛敬白

按ろり西佛と称る者三人あり是非をまゐ其一ハ法然上人の弟子小頭宮内卿五帝を傳
盛政入道西佛又其二ハ海北幸親の男嶽人通廣世小志夫佐覚明と云是ちり後親雪上人
の弟子とちりと西佛と号と又其三小東鹽建長五年八月廿日小総国下河辺庄の堤を築
固ゐき中沙弥あり奉行人を定らくとゐる条ヤ小孫田三郎入道西佛といつる名を挙ちり
ゐのとく同名三人まとあれいつ也を是とすべしや俗面年号と記ゼられい詳小定ゐ已牧奚への訴正
を埃といゐ

護摩壇之趾　同所然ハ権現の後の方坪の中小あり宝和帝天長年間慈覚大師東国
伽藍を再興ありて永く止観の法燈をかゝ遊化の路次適當寺小詣り室前小持念するのあゐ三社権現の霊示あり
加藍人法の繁榮を祈りゆひし　護國殿　多聞天等を安置せし堂ハ往古鴻羽祇の尤尤
より坂東順礼記ちり出さり　東照大権現の御宮あり一頃の護摩堂ちりしを寛永十九年二月の炎上小焼殘ちりしをそゐ
東照大権現の御宮あり一頃の護摩堂ちりしを寛永十九年二月の炎上小焼殘ちりしをそゐ
侵此至へ迂しゐしと此殿小松昔あるも葵の御紋を附ゐ　東照大権現の御宮ありしを寛永十九年
佐鳴明神社　本堂の左の方小あり昔此尤小　二月十九日門前ちり出火と其時ちあるを
御宮焼亡ありし小依

六月十五日
祭礼の図



節分會

世音菩薩

十七日

夜燈

森田氏
内田氏

兵藤平内左衛
二王座禅像

御城内の葉山

御迂也あり て其係此神を勸請す其 御宮あり 地もとの僧侶此神の後の方ちり人の備んをなさく坂を往て傍の六角堂小地蔵菩薩と妻と是も御宮あり 頃の供水まつて則堂のわきに井ちり又社前の石橋も其僧小右ちり僧の小祠ちろ石の蛭子大黒のあ像いとも小弘法大師の作ちりといつり

銭塚辨財天祠

同所小あり 来世蔵菩薩 例幣使松 同所御手洗池のかさもちにありて坂を 兵衛の祭小詳ちり 例幣使 祭同のとき昔よりのちろ帰路の日ハ必ずとの地あ〳〵休息あり 往古ハ 御宮あり 奴小くのことく 此所小

西宮稲荷祠

山門の前右の方小あり当山地主の神ちりて尚草の落字ちろ〳〵さもに蛭子稲荷を小千束稲荷といつりとて家風の華表の額小稲荷大明神とあるハ大明院公妙法親王の書 祠ある故小社ちり是を上千束稲荷と称して苔龍泉寺村小あるところの ちろ〳〵といつり傍の祠小頓阿法師の他九人九の神像を安置又同一九の方小石地蔵あり 祈願あるものの因果をとりつく念をなすり因果

平内兵衛像

二王門の前右の方小あり平内左衛門兵衛氏ちり再度記とある書小むり 地蔵菩薩の 青山主服といつる人のあ士ちりて強勇の人ちりと云 後年石平道人正三鈴木九郎夫の門人とちりて ちろ〳〵 禅学を修とて則此石像も二王座禅の躰相ちり 孫迂侯義寺墳墓夫婦同會の碑面小兵衛氏無冥一索居士桑氏 銭塚 称すハ大ちろあやちりちり 松室堂毒大姉とあれハ平内左衛氏ちろ〳〵けり 世小老女知才天と唱ハ神躰ハ義覚大師

辨財天社

山門の前右の方他の中島小山の上小あり世小老女知才天と唱ハ神躰ハ義覚大師 の尤今西宮稲荷の他とちり江戸雀をよく紫一本ちり〳〵小寛文年中の江戸絵図小も当社ハ二王門 空地ちり〳〵親言多至の祠像のをあり堂社ハ紫一本小山門の東の方小大佛を安置一奉ら むと染たる山ありといつるハ今の弁才天の社ある不の小山といつり故ふむりハ大佛山といひくるよ 地蔵小俗島明神の地小銭塚弁天といつる小祠ちり是も当社と一躰の神ちりんを小田原記をとり 小条五代記等の書小大永二年九月のちりハ小条氏綱よりの使とて冨永三郎左衛門尉の御 所へ参りて帰ると当寺の観音へ参詣せり小折ゆ十八日ちれハ常よりも殊小参詣の人

殘鯨堂の邊より鯨魚出ることあり
異の形なれば
鯨鐘 日所小あり 二尺時是を撞く

鐘銘曰寛永丙子歳
大猷院家光公詣當山觀音堂見伽藍破壞卽命改
作之凡二十餘所又於堂後林中創建
東照宮後僅數歳民屋火起神宮佛閣悉燬燼公復
命老臣某等營造如初自爾日還日往年來超四十
大風兩所侵寢至敗毀今
樹幕下義先公之事起土木之功命山城守戸
田忠昌使十帛尤衛門尉建部昌孝五帛尤衛門尉
三浦義成八帛右衛門尉國領重清薫匠事嗚呼結
構之崇彩飾之美仰而可望俯而可欽功德之大豈
可量哉其樓上所掛之鐘亦破裂因改鑄之備後弁
牧野成貞喜捨黃金二百兩爲常被十二時之資糧
鐘既成作銘並序刻之銘曰
鎔銅鑄鐘己成撞之擊之殷殷雷轟
鐘本無音觸物能鳴音聲種種何唯一切衆生
衆生一切種種有聲迷夢頓驚況斯薩捶威德嶢嶸
鯨吼忽發諸苦解脫悲願維明
誠念彼力其名
元祿五年次壬申八月日
武州豐島郡金龍山淺草寺
別當權僧正宣存拜撰

鑄師武州深川　大田近江大掾藤原正次

石枕　海中東中小苫州玉院小あり庭中小小さ沈あり是を焼ら沈と号すすさ尚まの什宝小代石の枕あり傳説に文明年中道真の北后田圃雑記小生る文章をと小記を頗る倍付と異ちり四紀ら

をりつゝ左小拳て其伝く

来ゝるゆの久〜紀をちゝ〜む

田圃雑記云　此里れるとて小石枕とゝるゆ〜たかふ石ひのり其故を

尋ゝ見い中頃の年小やありゝむゆすちゆ〜ひ作り娘を一人持てり

き容ゝをおほゝるよのつ祇ちりりかの父母娘を遊女小ちて道あさ

ゆとふおむゝひかの石枕ゝとて交會のゆとひをゆと〜

ちりゝ兼てよりあいつの夏ちれい折をもか〜ひて彼父母枕のゝと

年に五寄ゝくとも祝〜ちりゝる男のかう〜をうちたきて衣装以下

の物を取て一生を送り作りたさるほとふ彼娘はやゝ〜ふひゝふやう

あるひさ年や筏程もちれ世の中小かゝるゆ〜きの業を〜て父母

ゝろとも小悪越小蓬〜て永劫沈淪とむゆのかれ〜さ先非小重て

い悔ても益れ〜是より後のゆさま〜立夫〜て所詮我父母を生〜ゆ

楊枝店

境内楊枝を鬻ぐ店甚だ多し　柳屋と称するものをりて本原とを

さくと今ハ其孫号を唱ふる　ゆのまゝく竟よ

ゆ沈の名産とゝ

ゝる也ゝ僧弘律

よ楊枝よ九ッの

利あゝゆを載て

云く

一よに若〜ゝ

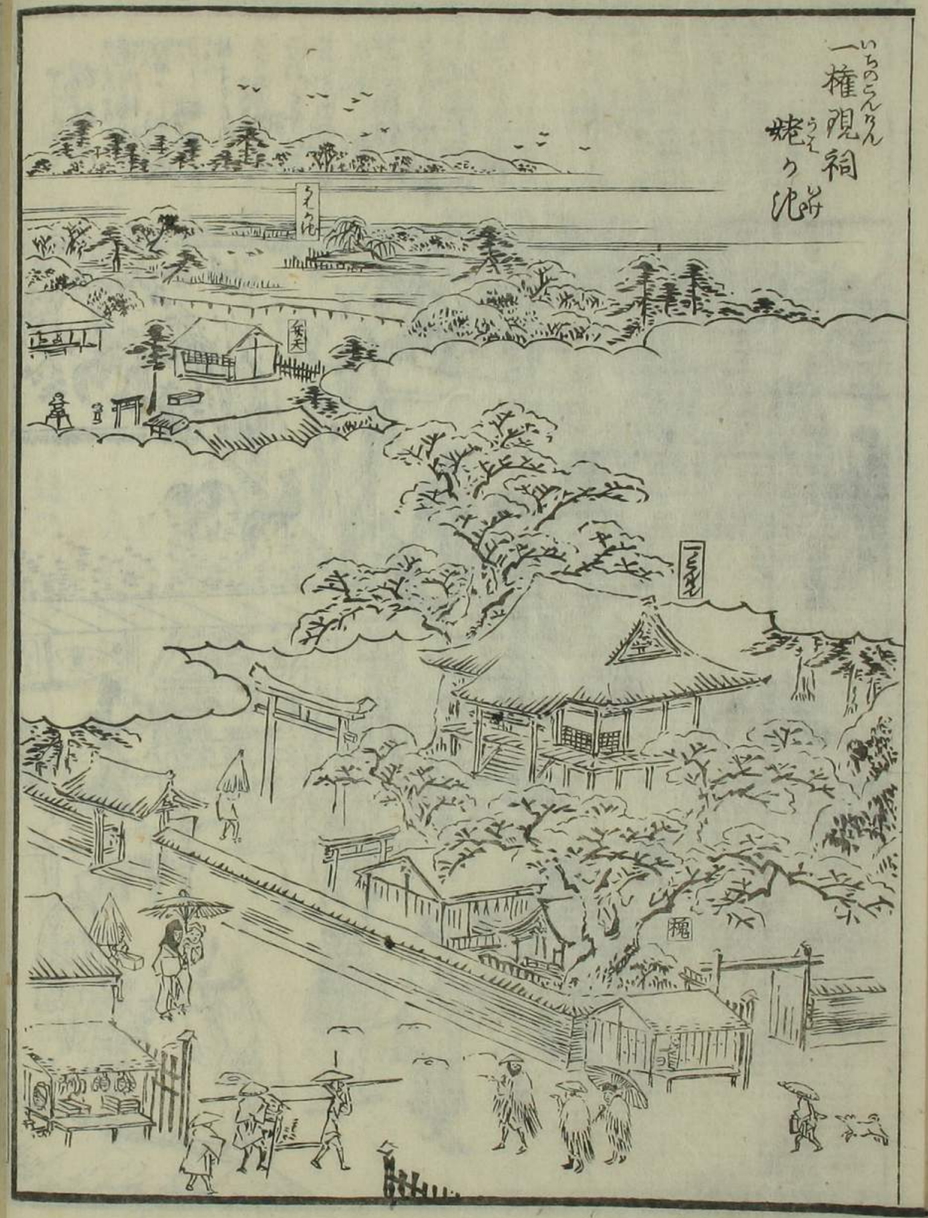
二よに臭〜ゝ

三よ風を除き

四よ熱を去て

五よ疫をのゝく

とあり



きて見むと思ひある時道ゆくひとありと告て男の如く出立て彼石小
舟ありいつもの如くむ得て頭を打くだきたり急き物とも取むとく
引かつきたる衣をあけて見るに人獨ありけるとおもひてよく〳〵
きれい我娘ありむもられまことひてなさまを云ちうをれ〳〵夫
より彼父母をもとふ發ん〳〵と度くの悪業をも懺悔〳〵と今の
娘の菩提をも深くとふ〳〵ひまつりくらくと語伝へるよ〳〵古老の命れ
ハ

ほとゝとのこゝろる世もちき石枕さこそおり紀思ちるらめ

當所の寺号淺草寺といつる十一面観音小てまつをきくひはさ
霊佛ゆてき〳〵くくるとちむ下略

一権現社　因所顕松院の境内小あり土倍あふむ堂と云往古當寺本尊観世音出現のとこさ
ちり姥小あるさ堂と号ふさを後世謬て所の草刈の輩葬をりつく柱とひとつの草堂と建て彼霊像を安置〳〵奉ま〳〵旧跡
とり傍小観音影向の槐あり

六地蔵石燈籠　雷神門の外荒川戸町の入口角小あり姥小土人呼所の石岸をさして古地蔵
（打岸とゝりとの池い往古より奥州海道の馬次ちり〳〵と其頃ハんんの

十二月十八日
年の市

観音堂の
西面より
念佛堂の
くゝとを
望むの図

馬市
萩の内と
いろよ
毎年
十二月
南部
二郡
桟鋪
桟鋪

門前籠屋町少し上に六角堂あり召燈籠のあらう馬場の北の辺坊あり〳〵といつり此坊小今も毎年十二月十八日の市ゝ此辺草海苔を賣ふ家〳〵あり近年より泰弦る猿人と〳〵と止宿し〳〵ると伝云久安二年丙寅左馬頭義朝當寺観音〳〵に泰弦あつゝ渚堂造營の時鎌田太郎正清奉納の竿名小路あれとも文安剥落〳〵鮮明ゝ〳〵と唯久安六月十日一書小十月廿二日とあり兵衛の九字のこ今猶現然ゝとあり六尺あり広袋の高小六躰の地蔵をそ彫刻せり

坊舎三十余宇　當寺の境草生一の精舎あり〳〵境内霊神霊佛甚多く投峯小いとまあ〳〵も故小悉く拾遺ゝ

専堂坊　斎堂坊　常音坊　此三坊は僕者三人の遠裔ゝ〳〵て妻帯ゝれい今ゆあり孫連綿として相續す則滿年三月十七日祭礼の時も三人の輩三基の神輿を供奉ゝ又三坊のうちより

観音畧縁記牛王宝印筆を出せり

雷神門　當寺南の總門なり左右小風雷の二神を安置し羽和の田緑小畏ゝて鳥首とせり

額　金龍山　曼珠院二品良尚親王真蹟

本尊縁起曰人皇三十四代推古天皇の御宇士師臣中知といつる人故あ

て此地小流浪　日本紀曰垂仁天皇三十一年野見宿禰小始て土師氏の姓を賜ふとあり所見宿禰小天穂日命十四世の孫ゝりと小いる中知も此遠裔ゝりへ〳〵山岡州阿弥陀佛云中知小奈加登茂又登岐奈利とも訓ゝといつり

家臣檜熊濱成武成と云二人の兄弟附添て王従三人恒小漁猟を産業と〳〵て小年月を送ゝり　檜熊或檜前小作ゝ新撰姓氏録小檜前舎人連と云此時小檜前小作と可ゝ〳〵ん〳〵と續日本後記小檜前舎人直由加麻呂武蔵國小美郡の人小〳〵て士師氏と称ゝ国すゝとあり又延喜式兵部省諸国る牛の牧の中ゝも武蔵國檜前馬牧とあり是等小ゝとも

同三十六年戊子三月十八日の朝碧落小雲消て蒼溟小風静ゝて小れい小舟小乗〳〵此所の沖小出て網をやまを小海草川むゝ名を宮戸川と称ゝ遊興いさゝ小れ〳〵幾度も回〳〵観音大士のそる像のこ小安置小

異浦小至りてもいよ〳〵志かり候て主従数ゝ是を奉持〳〵〳〵帰る

機縁の淺〳〵さゝを歎て其家小安すといへとも唯臭臭の穢小雑ゝゆを忘ゝのこ　世小草刈の童集つゝ藝をとりつゝ伐の御堂を造るとゝゝゝ縁起小所見ゝ　こゝ小を〳〵て終小魚舎をあゝ

多年て一宇の香堂を経營ゝり彼尊像を安置〳〵奉る　今の一權現の其地其間なり

後鳥羽明天皇の御宇十年戊戌正月十八日霊告あり て田禄す　其後又三月を経て幾比夫より田禄七度小及ぶとゝとも幸ゝへ自〳〵火焔を発ぬひて恙れ〳〵元人皆奇ゝりとす是累年此地小漁猟殺生を業ゝて行穢の所ゝれい焼除て元の霊場とゝゝんゝりそゝく

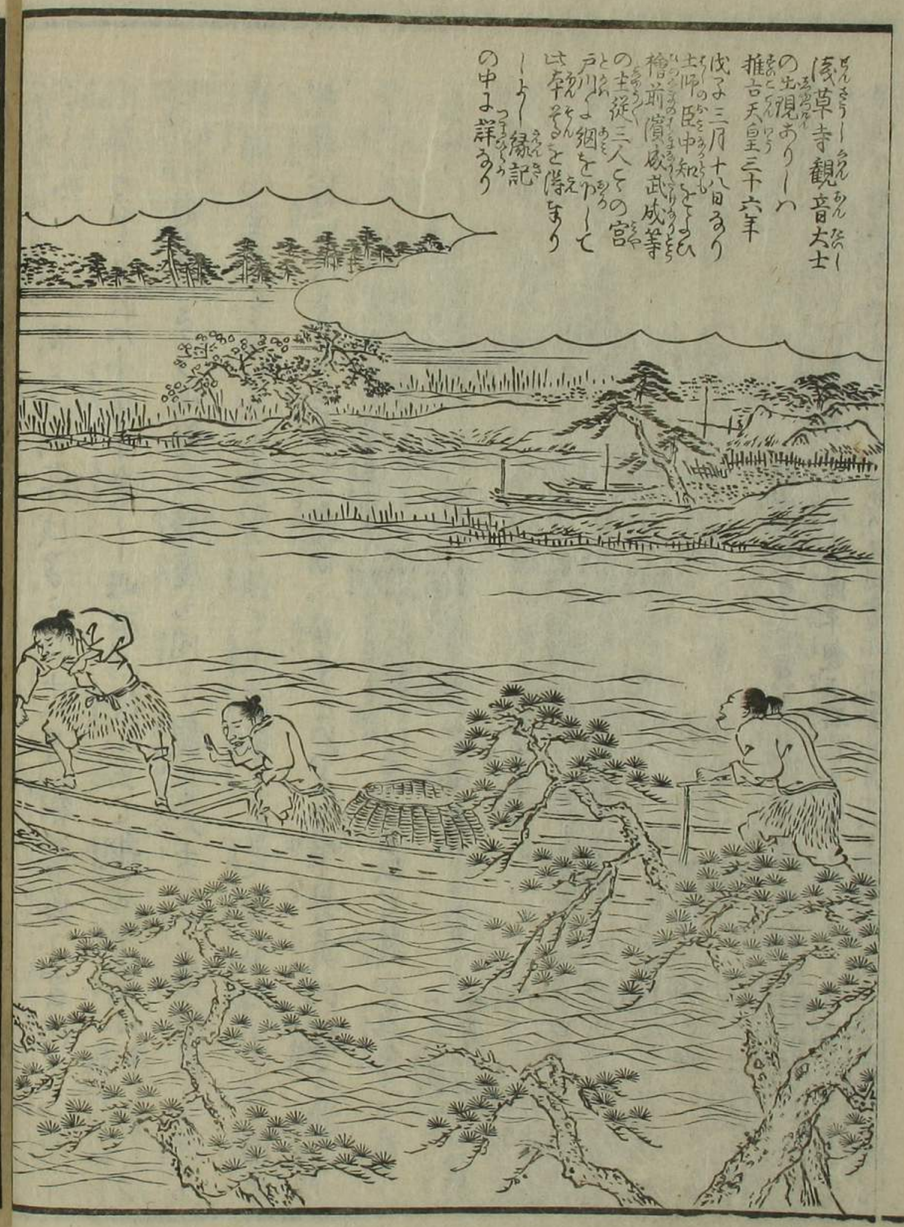
ハ幸ゝる示現あり〳〵と伝ゝ後久く堂宇破壊小をよひ〳〵と孝徳天皇大化元炎上の後霊験ゝ〳〵いちゝ〳〵

年乙巳勝海上人東行の次適こゝ小来て再營す　則當寺の冠山と称ゝとこのとき勝海上人幸ゝるの尭容を拝て奇異の霊告をかゝむり夫より天慶五年壬寅安房守平公雅已降秘佛とゝて拝するのちゝ〳〵

天慶三年三月廿九日大系図小従五位上平雅武蔵守小任ゝ

より〳〵前大平記巻六巻小菅原秀卿平親王將門を謀する功小よりゝ〳〵

武蔵下野両國の守小任ゝらゝとあり又国書小国四年七月十六日諸記小三月將門純友誅戮の時も


浅草寺観音大士
の出現ありしい
推古天皇三十六年
戊子三月十八日ありし
土師の臣中知とこれ
稚前濱成武成等
の士従三人その宮
戸川に網をかけて
はかそるを得たり
しかし縁記
の中に詳なり

往古土師臣中知をもて
檜前濱成武成等の
主従、草刈に細しと
観音大士の霊儀を
感得ず、此地の
草刈集て菴を
なす仮の御堂を地
内に建本尊を
安置しぬ其四方今の
東谷一の権現の地
なり草刈人後神と
なりて十社権現と
いつきまつりぬ

両度の戰ひに軍功あるを以て武藏守に任じ給れしかの国五年の期任限満すして重病に依て雅
を出国の守に任じ給ふことあり公雅に常陸大掾国香の末裔上總介良兼の長男なり平將門を謀て切腹あ
て一方の帥に連
當寺すに詣當国の太守たるむ夏を祈求すいくもくあるをして辻任し
此国の守となるれい霊験の空かくけるをあめき奉て本堂をはじめ宝塔撞樓
樓門経藏法華常行堂所の社壇を造ること田園數百町を附して長く龍
華の曉を期せむ　又長久二年辛巳十二月廿二日大地震動しく佛宮顛倒
三年己未十二月廿日堂塔回禄す其時本尊火中を出く坤の榎の樹うつて
ゆふ兼德二年戊寅四月藤原成實四箇年の間當国を律任し猶重任の望
めりく新願し霊験あり依代々宰籠の田畑を乗くえの如く皆免入し奉
桜小大系図小係成實とこしく武藏介ふ
るありなるあり小孫愿とあり誤なへし　其後左馬頭源義朝當寺に參詣あるこ
堂塔を修造し彼坤の榎を以新に観音の像を彫刻して納らる　其像今内陣
奉行鎌田兵衛政清と書けり坂東順礼記に康治年中義朝當寺観音に依るとありまた花川
戸の地蔵の石燈籠の銘に久安二年丙寅とあり鎌田兵衛の建ると云り依て按ふに康治より久安
善請のもをつくさとり　ころの事なるべし　又仁安三年戊子用舜法印大願に同ん
しく佛閣を修造す治承四年庚子十月十七日　縁起に八月十七日とあり誤なり十七日に小
紙を初る宗徒のくに八牧判官兼隆う請ふ

盛衰記をよく参物語等の書に出ず召橋山の麓ひも国北日のるうとしいまさ安房
国にもくくさろ光のれい頼朝當寺に参詣あるに依て又盛衰記に治承四年九月十日武藏武藏下總
の境なる松戸の庄市川に着なりと東鑑に治承四年十月二日武藏右井
隅田の両河を渡らくとあれば八月十七日とするべきほどなる誤なり
右兵衛佐源頼朝参詣ひり
く田園若干を寄附せらる是平家追討の新願に依るなり　承久三年辛巳
ろに禅尼政子二品及相加武加両刺史致信し願書を捧げ白檀の大悲の
像一軀と白毫の綾羅の帳一ろれ信濃布千端を寄附ありまく伏見院
御宇正應二年己丑十月廿一日大鋪堂とのつる伝門其頃堂宇の破壞を數十
方に勧進して正安二年庚子三月十八日後嵯峨成す其後建武年中將軍
尊氏鎮西發向の折かく夢想に依て當寺観音に願書をとらせ国観音
三年壬辰　今年文和と改元あり　閏二月廿日　縁起に三月廿日とあるは誤なり
南朝の正平七年なり
利あらんをを祈願あるて合戦の後美田を寄らる　武藏野合戦にも兼て勝
利あるべきを祈願あるて合戦の後美田を寄らる　永和二年戊午十二月十三日　仙臺四郎
定俗なる者勧進の功を募て盛永小りて建立成就とり　夫より後天文四年乙未八月十八日炎
上す其頃相加小田原の城主北条氏綱當国を領しくれい破壞の諸堂再
興ありく大伽藍と　天文八年己亥五月十八日當寺奉加帳に島津長德軒大道寺盛
冨松田盛秀等の名を住し加に是本文の意に合もり又知足軒

友山鶴の謡小冠和年中迄の棟札小武州所越津主大道寺
駿河守是を奉行すとありと
北条氏康の遠山丹波守の祈るゝ又其師忠善上人とゝ
伊丹三河守のゝ三河守宿願の事ありく祈るを改門と一當寺の別當と是より後八代々伊丹遠山の
あ家より別當職と
相續ゝとゝ

忠善上人を以て別當職とす

忠善上人八
按細川律師定禅の赤葉武品金澤の明土

然るに永禄年中故あるて二年の或人云良尊
別當知樂院權僧正宣存

鎌倉へ退居し夫より東慮山に属を當寺奉尊八殊に

大神君　御信仰最篤まに依る寺領若干を附せらるゝ寛永十九年二月十九日

田緑の後も慶安三年庚寅六月三日手鉾をしめ寄堂塔御建立あり

らのかゝ　公より修理を加へられ誠に無雙の霊場とゝもに

修正會　除夜より正月六日に至る　牛王加持　同九日巳の刻執行す同日三社　多羅尼會　同十二日より

一七日の間昼夜一七日の間毎夕追儺あり

祭禮　滿年三月十八日ゆうらの祭れハ往古正和元年の神輿を本堂へ

神輿を本堂へ　拍板獅子舞あり當日八神輿を武州六大麦年の函村より

温座ゝて修行す

帰輿八神輿より上へとゝ

養市　同日近在の農夫養を持ち雷神門の前

拍板　毎年六月十九日執行と此日も三月十七日の

神輿を先行す祭礼八鎌倉右府將軍再興

千日桑　七月十日の夜より桑苗群集ゝり俗小この

年の市

日とゝ四万六千日に

抑當寺八千百七十有余年を経の古刹ゝて實小日域無雙霊場の霊

區ゝり其霊験の著八普く世小知所ゝり常小金鈴玉磬の響絶す焼香

散華の勤行怠ゝ変ゝ朝より夕小至る近桑苗の貴賤袖を連く場り

充満ゝ殊更月毎の十七日ゝ通夜の緇素堂中小桑籠ゝて終夜誦経念

咒怠慢ゝ又境内賣物の数多ゝ中ゝも錦袋圓淺草餅揚枝殊枝五倍

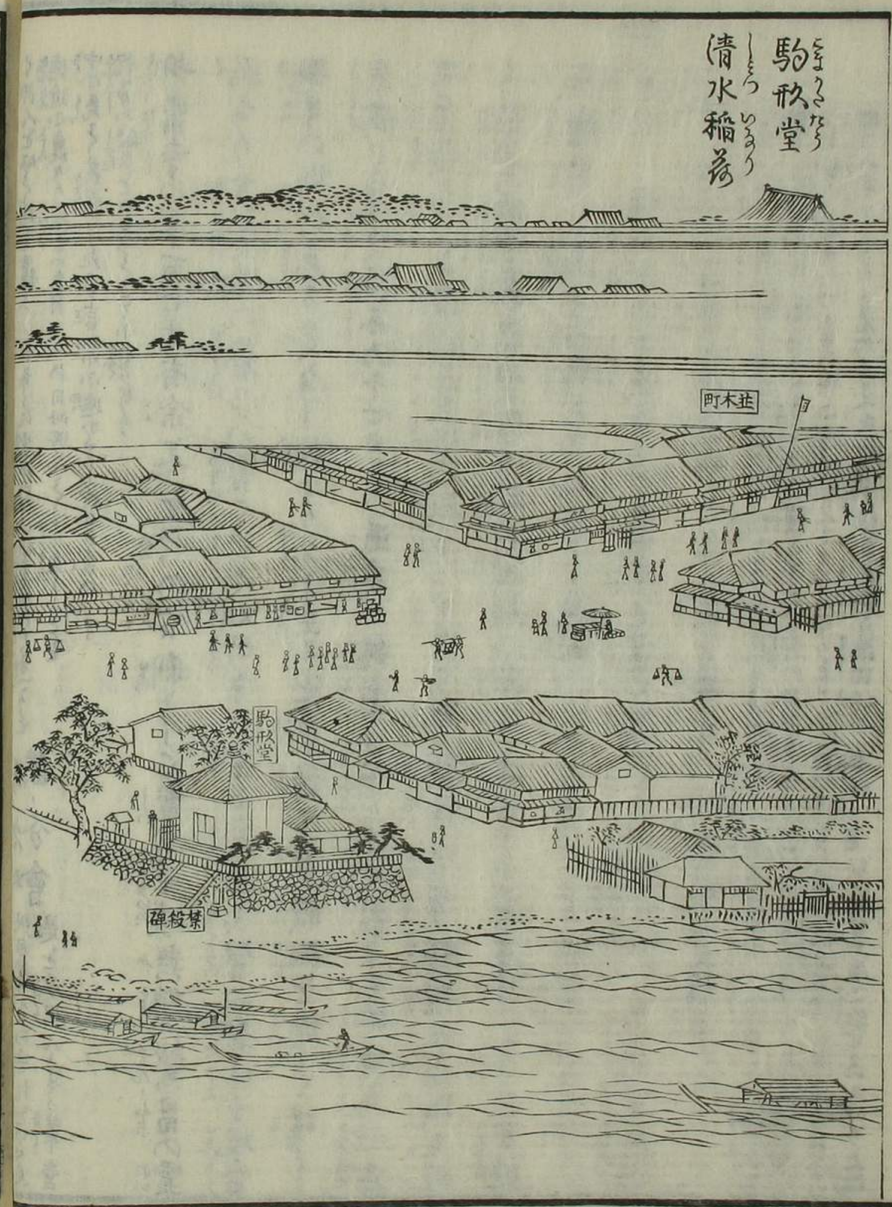
ゝ茶釜酒中花香奠浮人形の類殊小浅草海苔ゝ其名世小芳ゝ手遊

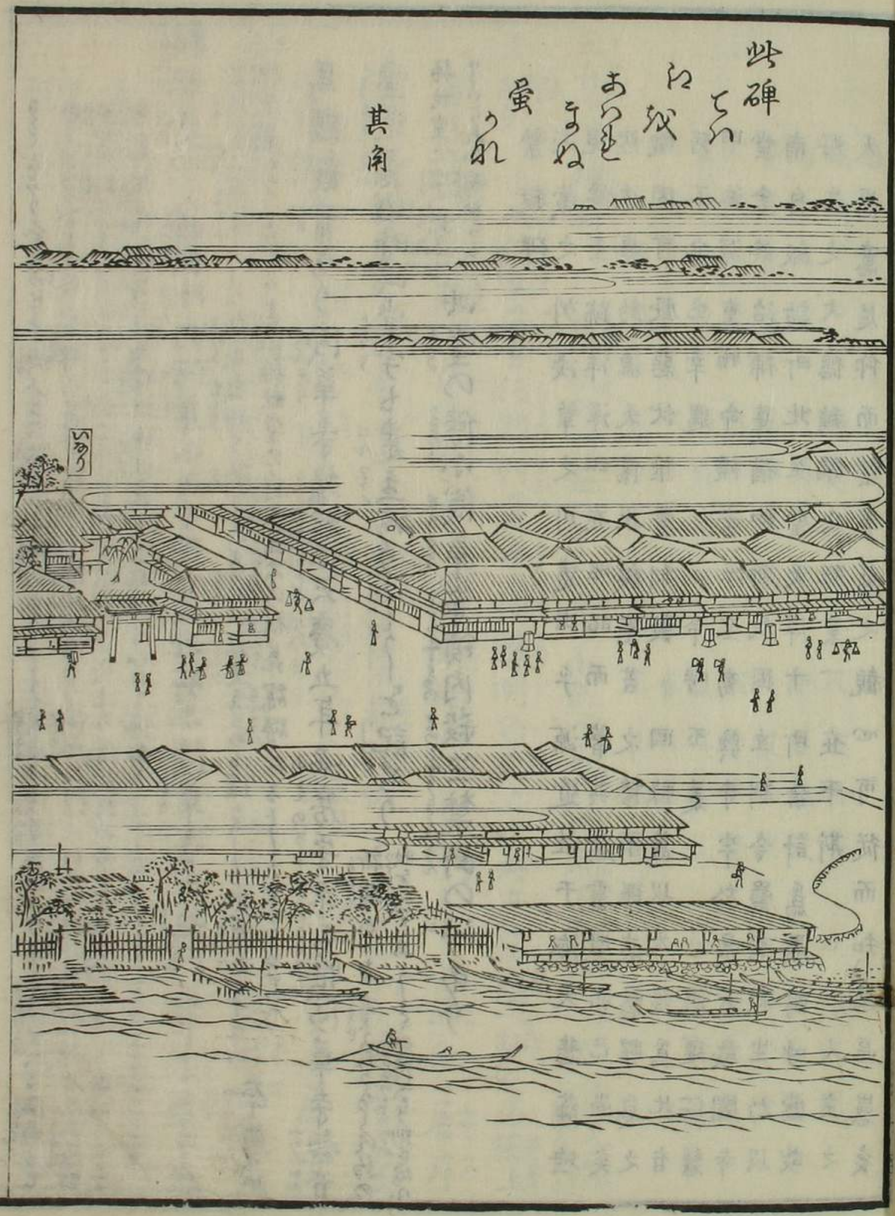
錦繪等を商ふ店軒をゝ連ね地邦の人とゝ小至りく其繁昌を考へ

淺草川　隅田河の下流ゝく舊名を宮戸川と呼ゝ　白魚紫鯉の

二品を此河の名産とゝ美味ゝく是を賞ゝり　鰻鱺蜆も又佳品とす

按小車考縁起の中小宮戸川の中小網を引とゝ源平盛衰記小俊基に年九月頼朝下
總より武蔵へ打越ゝく条下小名濱とまうす呼八宮戸河ゝ知行不ゝ西國船の着た
ゝを数千艘あつめ三日の中小俄橋をかけとあり此の辺入律の渓ゝく西国の
船もの未ゝとゝえたり又氏康武蔵野記行小隅田河小番船中要ゝ安房上總牛のあゝ渡


駒形堂
清水稲荷
荘木町
駒形堂
碑銘塚


此碑
其角

さくとあり今あゝ臣ふ考ふ其ふ往古ふ名漫のあるよう東南此淺草のあるり近も村民なる海面ふて
あり〳〵るべ〳〵土俗の碑ふ其むり〳〵卒呼深川のあるり海面あり〳〵此ハ今の其去山ハ伸より入津の
船の目的ふくあり〳〵とて仍て其ふる考ふる小木ヤ川より須田村のあるりを限て南のるるる
寺島柳島牛島六島猿江永代島あと称〳〵てむり〳〵海面あり〳〵とるるやりとるとする小ふれり

駒形堂　駒形町の西岸ふあり

往古ハ此所小淺草寺の總門あるとい
其頃い尤右並ふ〳〵て橘花枝様を栽ま〳〵春時ハ殊更あるめも深〳〵ふ寛永二十年の卒尊ハ
印牟東ゆるとる書ふ駒形堂の近辺並木の橘花爛漫たるよ〳〵をもるとり

馬頭観音あり　淺草寺縁起小天慶五年安房守平公雅淺草寺観音

堂造営の時此堂宇も建立ひり〳〵を記とり　祈願ある者賽ふ〳〵るる〳〵駒の
駒形堂と唱へ地名も　形を作てあ〳〵く堂内へ牛馬を除小
ゆるられふ因ふるる

此堂の傍小淺草寺領内殺生禁断の碑あり

禁殺碑
武蔵之州淺草之川遠出乎源近注干海大悲薩埵
現像垂跡洋洋如在昭昭而著其爲霊境亦己尚矣
然恣事釣漁矢傷水族寃苦之慘不勝哀愍腥臭之
殲固可厭惡伏惟霊刹數回禄蓋以大悲爲此有
所不安也幸遇今時丕業洪運仁慧
四海深重物命禮崇三宝旁興寺宇於是去歲闔寺
堂舍修治補葺猶如新成因立制令嚴戒殺生乃以
南自諏訪町北至聖天岸十町余計爲界嗚呼盛哉
好生之大德種福之勝業一在干斯人主之
天恩意足仰而望菩薩之観心可從而知區區愚衰
感仰有餘乃爲銘曰
維斯一心　即具三千　以我則乖　以観則圓
雛介異類　好惡同然　詎忍殘殺　不知哀憐
營生嗜味　逮禍取愆　畏報於後　思戒於眞
文明遇時　慈悲如天　綱罟作禁　魚鼈無度
豈但物命　因慈得全　教化所及　擊習能矮
元禄第六歲次昭陽作噩春三月
武州豊島郡金龍山淺草寺權僧正宣存誌

三島明神社　駒形町の西二丁ばかりふあり

積ふく土人伝云往古伊野某卒國豫州の地より此武蔵國へ起くの海上
ゆく風波の難ふ逢仍卒國一宮の御神ふ祈を奉り〳〵ふ恙なく着岸
せ〳〵ふ神恩を報奉らむと勧請あり〳〵由昔ハ苫坂卒ふあり
を元禄年中今の地へ迁さる　其頃地東蔵山の東の麓根岸村ふあり　祭礼ハ毎歲五月十五日なり

清水稲荷社　駒形町ふあり往古嘉兼年中弘法大師東國遊化のとき

此國へ入ぬと〳〵須霊岩ふよりく如意宝珠を神躰と〳〵稲荷ふ勧請〳〵た
まふとを　其地より清泉涌出る故ふ清水の名あり其後苫中感應寺の村とあり法華の勧請と
あり〳〵寒松院構のうちとある今清水と唱へ号を〳〵るハさるの後るり元禄の頃三島明神と
苫ふこの地ふうつされり按るふ元禄二年冠板の江戸惣鹿子といふる草紙ふ谷中稲荷清水今ふ猶せ

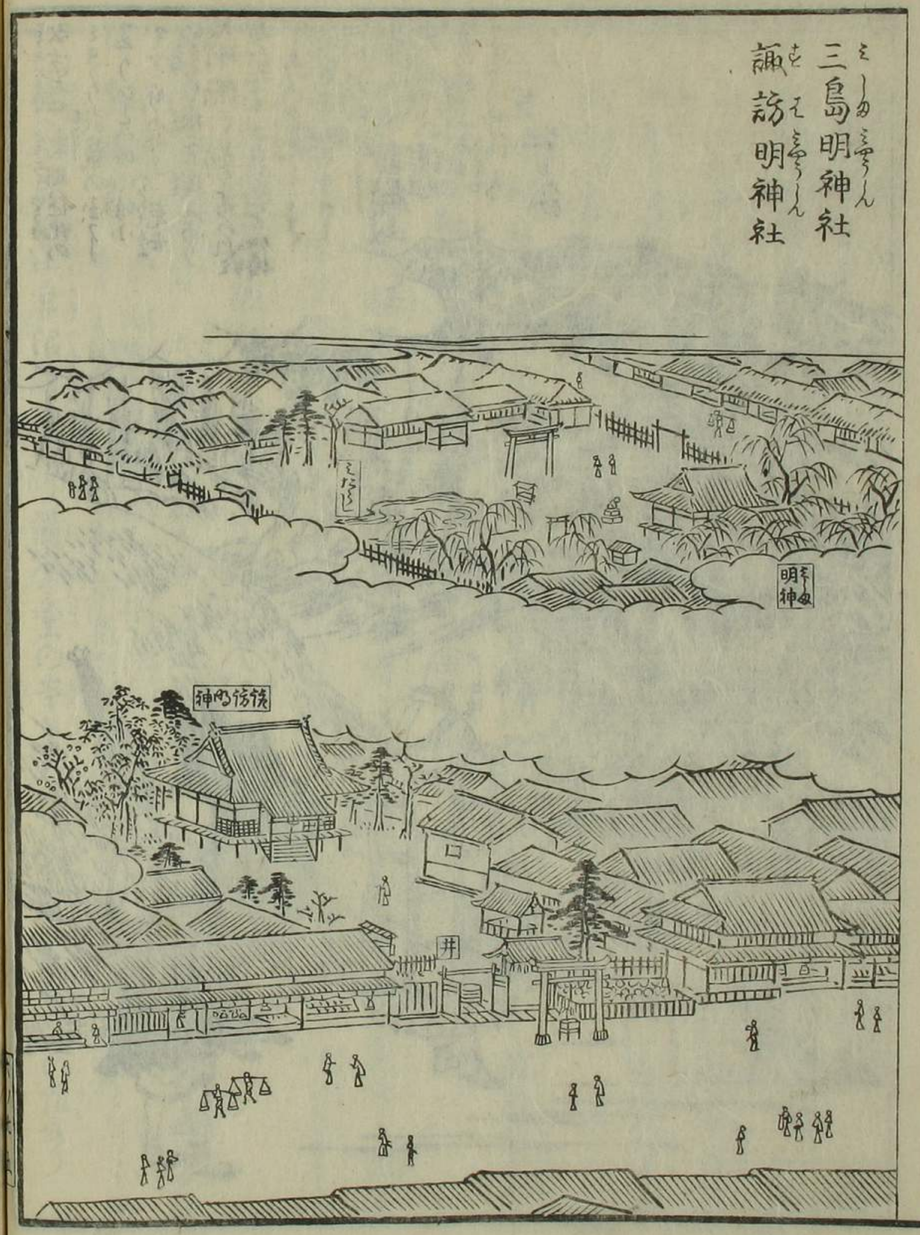
すこあれハ元禄の頃まてハ其清水湧然としてありしなるらむ今池のもとより護国院へ
行道の花畑と称する地の谷合より流出いつる清水ありこれなるらむ歟　又江戸名所記の説
に弘法大師東国遊化の砌武蔵国なるひとつの小坂に　東叡山西の黒門清水門の坂是なりといへり　かくて
ある頃老女の水桶を戴て行あり大師彼の水を乞たまふ時老女の云く此辺り
水ハ遠く是を汲由なりしかれハ大師憐ミ独鈷を以て加持したまひしかハ
其所に清泉涌出せし其傍に当社を勧請しありけるといふ

諏訪明神社　同所諏訪町にあり祭神ハ信州の諏訪に同しく健御名方命
なりて当社の権輿に至て久遠なりして来由等詳ならす

椎寺　同所黒船町にあり浄土宗にして増上寺に属す池中山正覚寺と号す
本尊阿弥陀如来ハ恵心僧都の作にして開山ハ観智国師なり往古当寺に
名ある大木の椎ありし故に号とせりといへり

石清水正八幡宮　大倉前にあり元禄五年　台命に仍て石清水正八幡宮を
勧請せり　昔ハ文殊院の八幡と称し高野山行人派の僧住職ありしか故ありて其地を改られ石清水正八幡宮を勧請す　別当を大護院と号し雄
徳山と云開山幸沼法印なり護摩堂の本尊ハ五大明王にして運慶の作なり

三島明神社
諏訪明神社

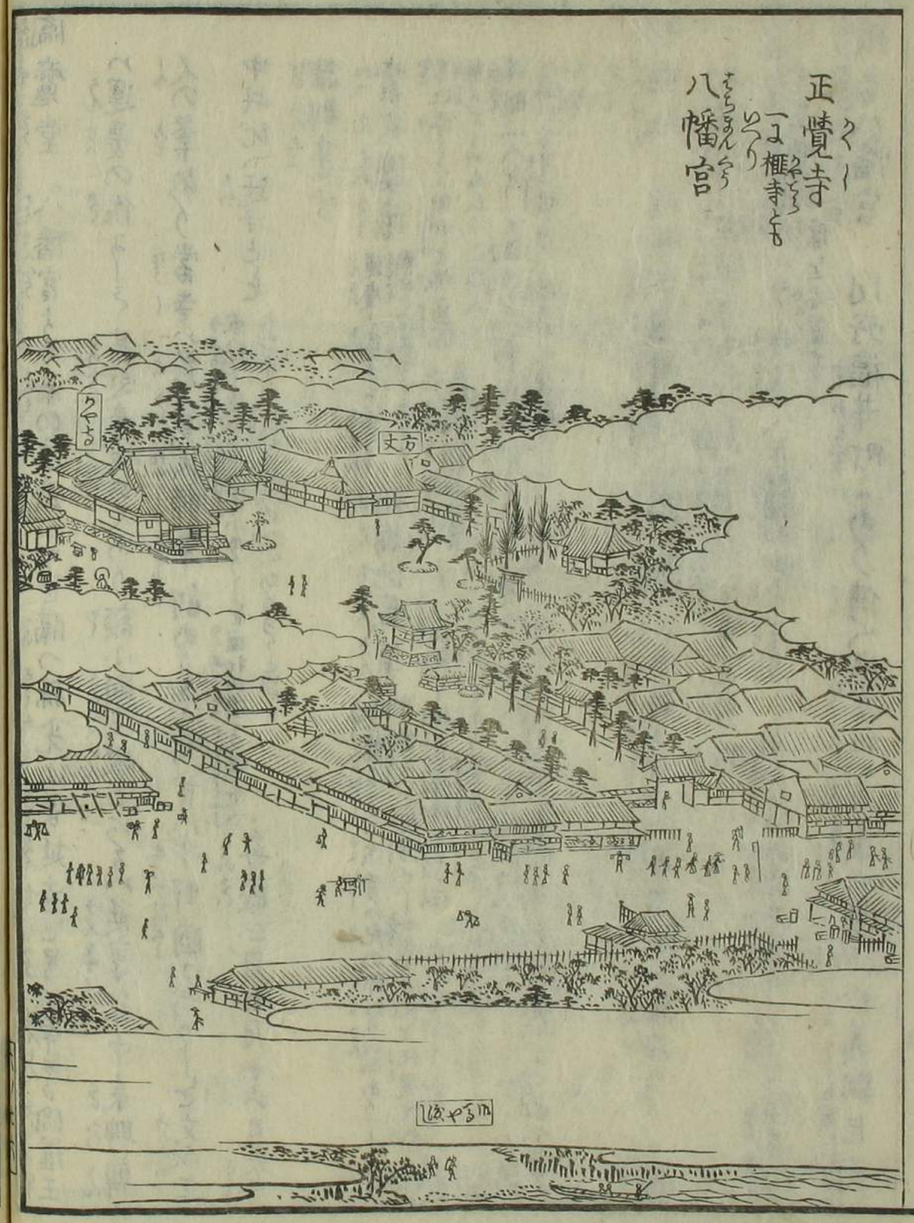


閻魔堂　八幡宮より南の方弐三丁を隔つ称光山長延寺と号し本尊閻羅王
の運慶の作なり其丈壱丈六尺あり額に閻王殿とあるは延享年中未聘韓
人の筆なり当寺は慈覚大師草創あるなり疇昔は野岡にあるを文永年
中此地に迁すと
或説に昔の震の宮ありしを国初の頃より資所へ
うつされ後復もとの地へひろめたり
諸群集す　毎歳四月七月十六日祭れ

奪衣婆像　運慶の作なりて本尊閻王と同木なるとなり　化馬地蔵尊　聖徳太子の作昔は紀の那知山にありしとそ
もに化しく彼女を仏道に帰入せしめ給ひしとなん　昔佛法を排傍せしより是を化度せんがため
佛眼上人ありて慈眼供養せしめ法皇より観音の大陀羅尼等の祈願をもつて大悲の像を作らせ給ふ
せ給ひしとそ　故あつて東叡山より二小祝し奉る是則菩提の権輿なり当寺境内に文永十一年の
古墳

祇園社　同所閻魔堂の南に隣る当社牛頭天王は天暦年中の鎮座なりとそ
大倉前の總鎮守にして別當を大国寺と号す
十王堂　境内にあり慶長十八年建立御建立なりしを中そろ地蔵菩薩なりと左右に冥府十王
の像を安置せり

銀杏八幡宮　同所福井町にあり傳へ云当社は永美六年源頼義朝臣同


正覚寺
一名櫛まき
八幡宮
方丈
坂やるm

八幡宮
御米蔵
大倉

義家朝臣奥州向の時て小至りたまふ小河上より銀杏木の流れ来る
あり則義家公手ずから地よりこれを拾て曰朝敵退治勝利のしるし此樹すこやふ
枝葉を栄へしとのり遂よ其軍勝利ありて凱陣の時あらひとまりのなな
枝葉栄々也八幡宮を勧請ありしとそ其昔八幡塚と唱へりとそ神木
の銀杏樹ハ延享二年の秋暴風よ吹折て今はふ其枯株を存せり

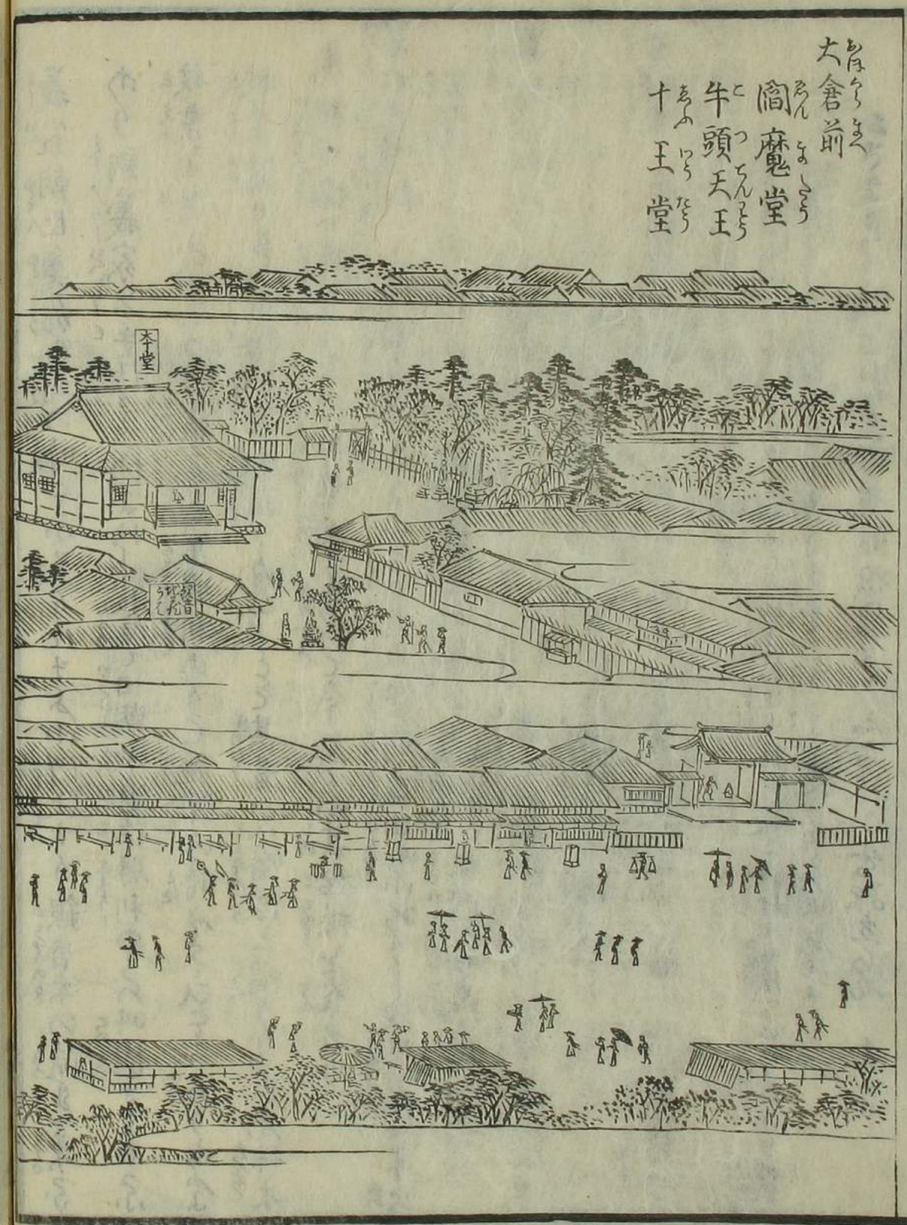
等六天神社　浅草橋の外よりあり昔ハ大倉前森田町ふりし成享よ保に年火
災の後今の地よ移る祭神ハ面足尊惶根尊なり　天神六代の神なり祭禮ハ毎歳六月六日なり

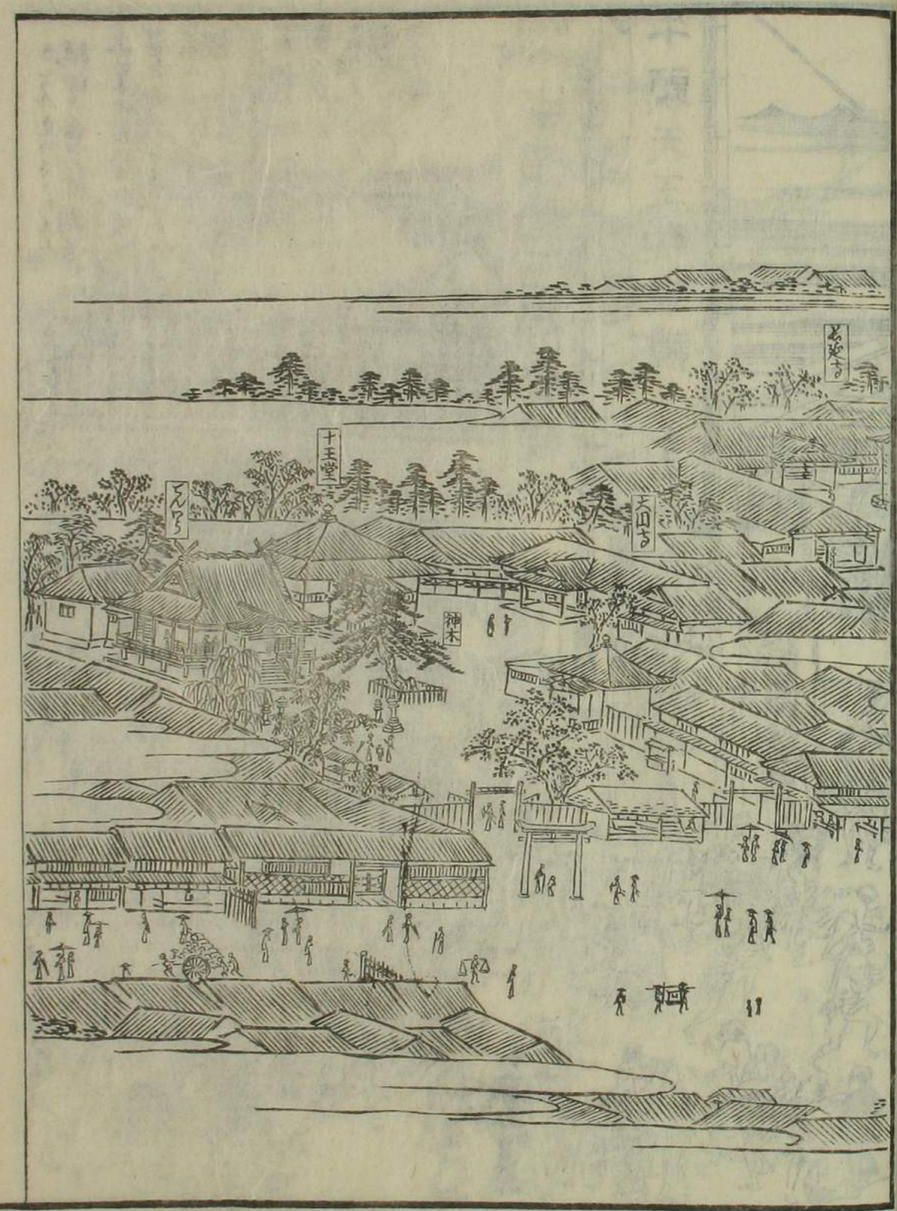
篠塚稲荷の社　當社の田社なり　社伝ふ云ふ　昔新田家臣篠塚伊賀守當社ハ伝
作し暁よ入道して社の側よ庵室を結ひて住ふ剃髪して篠院と号す　裔孫なりと云り

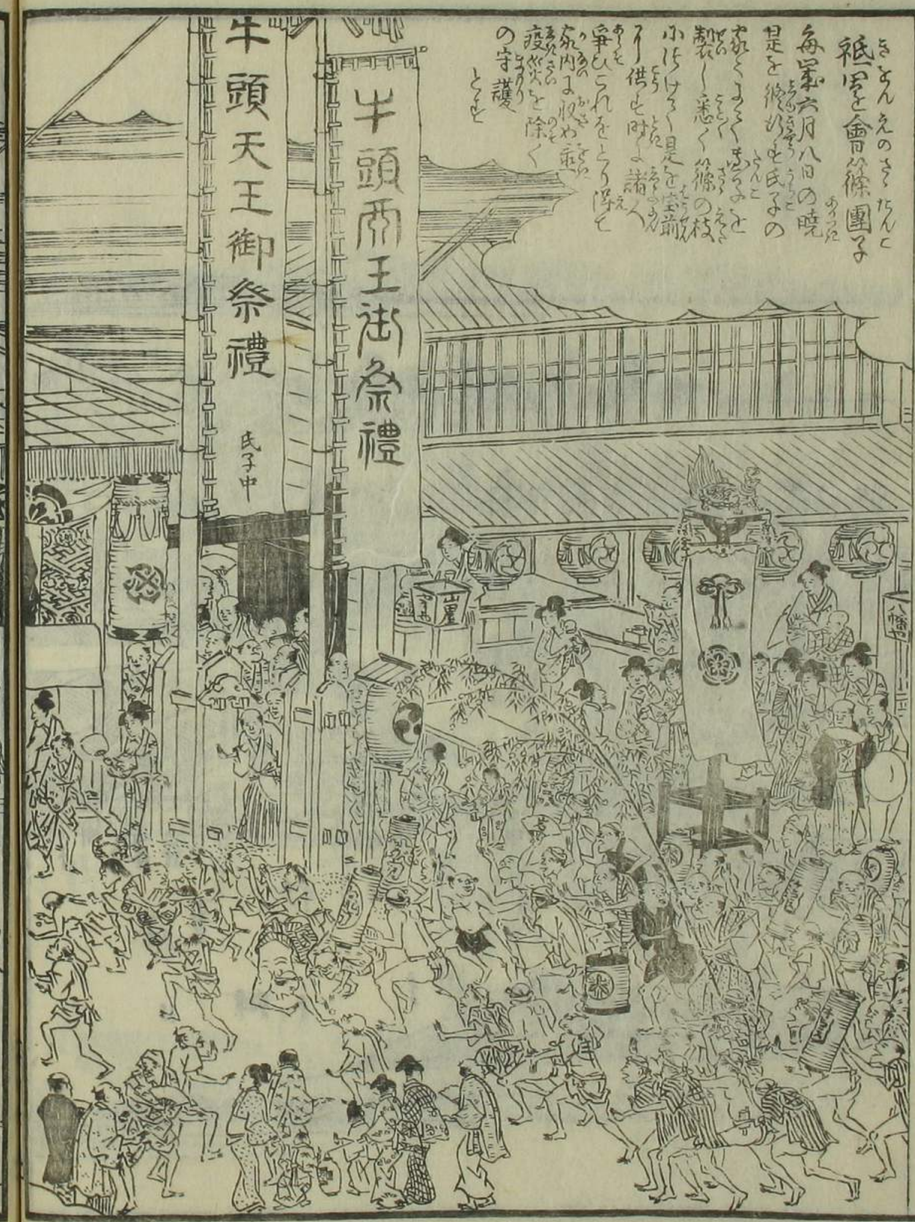
多越里　多越明神の辺より大食多の辺まてといへり小栗家分限帳ふ富水若狭守
江戸多越村の内と領すとそ　紀せり

竟恵北囮紀行ふ文明十八年十二月廿三日隅田河の辺多越といふる海村よ長流といふる箱ひり彼宅
ふ美やとりして雨林ふあり多越ふ金光ふ小至者一ちつり同十九年元日ふ

おさまるはをかけくや荒波根の戸とふ志ふ孫小巻孤立らん　竟恵


大倉前
閻魔堂
牛頭天王
十王堂
太十堂


十王堂
神木

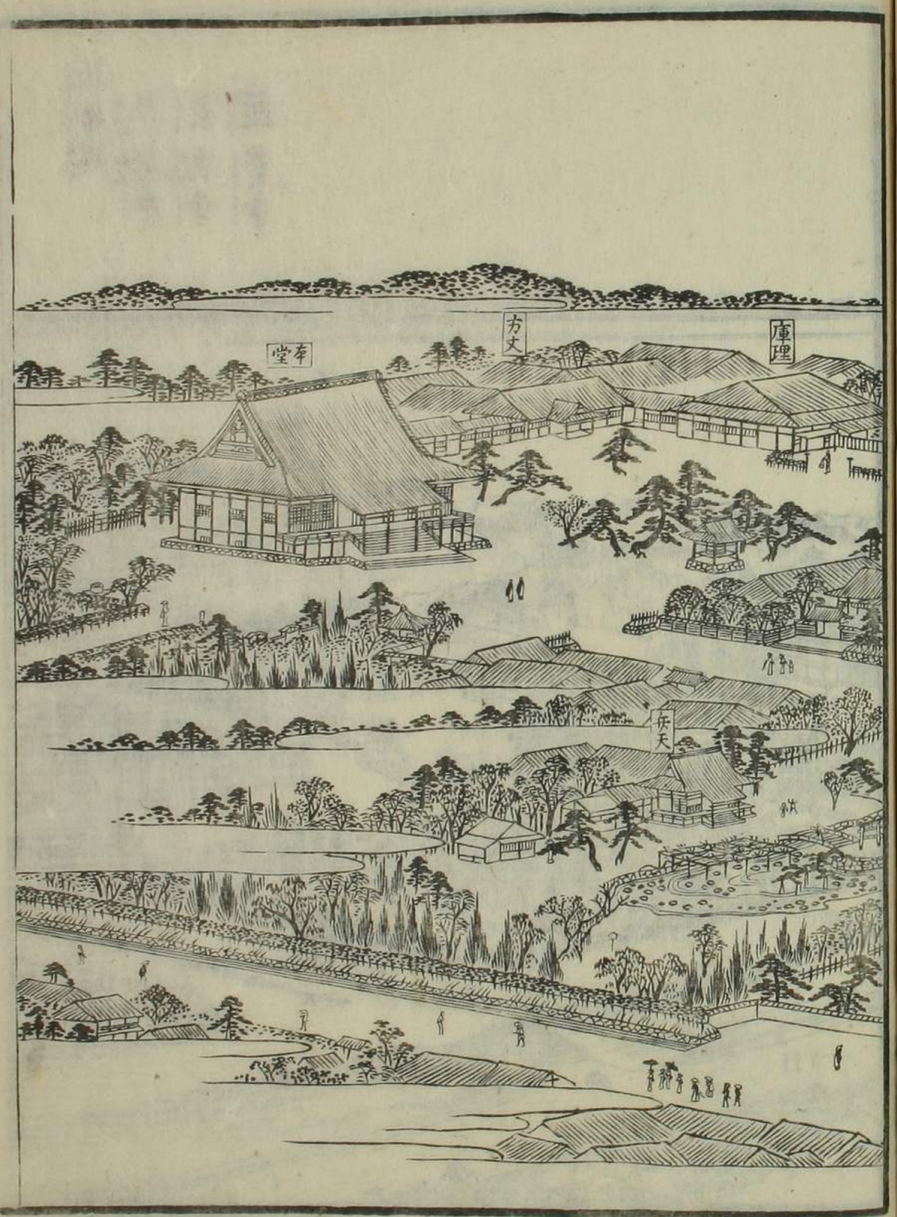

牛頭天王御祭禮
牛頭天王御祭禮
氏子中

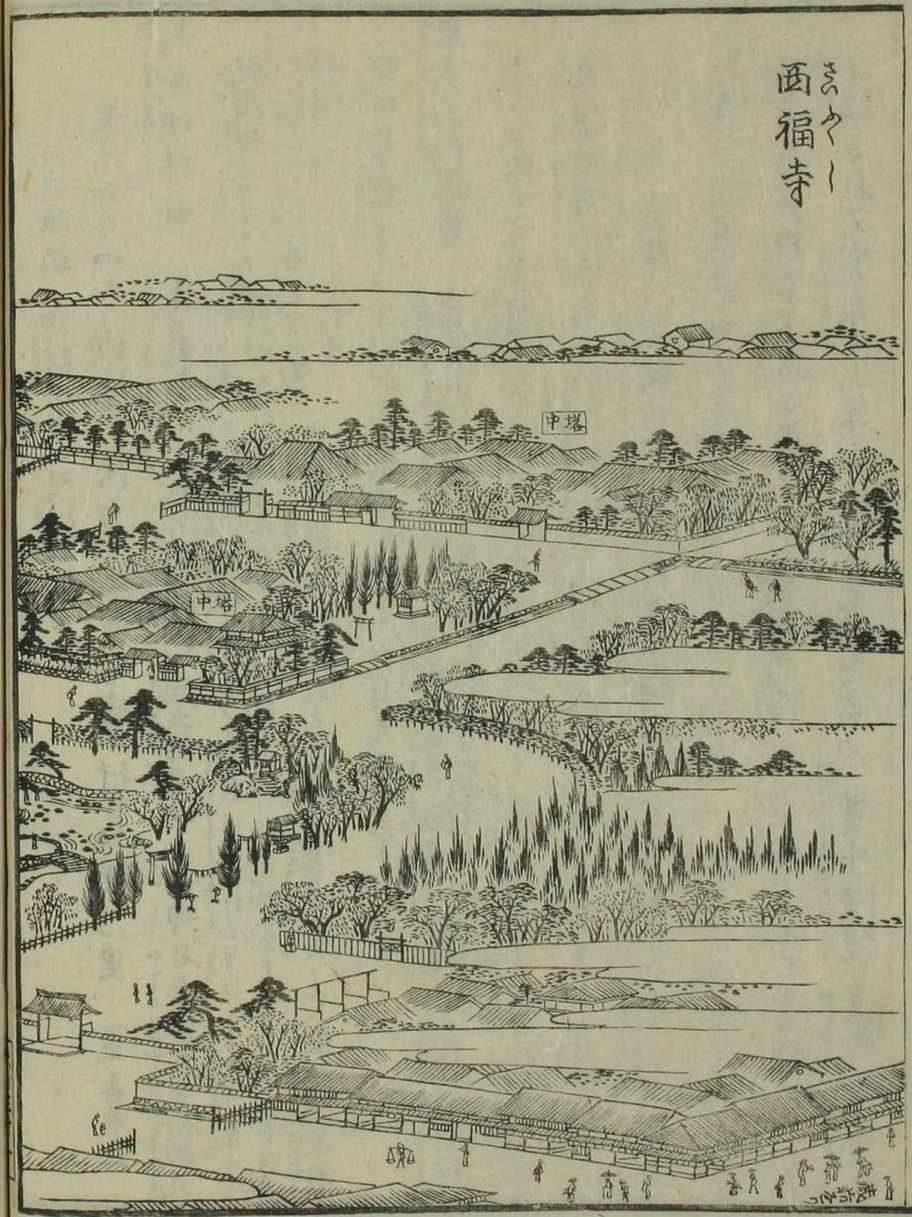
第六天
篠塚稲荷

鳥越の里といふ所より行くなとて
暮ふかり四ちりいのくといそく日ふるれも寢ふ行鳥越乃里　道真在后

鳥越明神社　元鳥越町よあり此邊の産土神とす祭神日本武尊相殿天
兒屋根命なり　昔の茅ヶ天神熟田明神を合せて鳥越三所明神と号けしか正保二年此地
より熟田の三谷の地へうつし茅ヶ當社の最古跡なれとも舊記等散失して勸請の年暦
天の熟田町へうつしとなり
来由等詳ならすとなり祭禮の陳年六月九日なり

東光山西福寺　良雲院と号ん　良雲院殿御尊骸を葬しる奉る故よ院号とと学ちふ　御墓所あり　鳥越明神
より三町ちりを東の方ふあり江戸淨宗四ヶ寺の隨一なり本尊阿弥陀如
来ハ安阿弥の作なり　三加ようう　廿七日ふ寂也　遠加犀ら渕戰死の迷魂冥山を真蓮社貞譽了傳上人と号と　元和八年五月
小等しるしハ其功を永世よ傳へよと　神祖　松平の御称号并山号
等すとあハ往古三加ふありしを慶長の頃　台命よ依て学園後河基
小稱られ又寛永十五年今の所よ地をあハ一基中法幢を立檀林小准也


方丈
庫理
布堂
安天

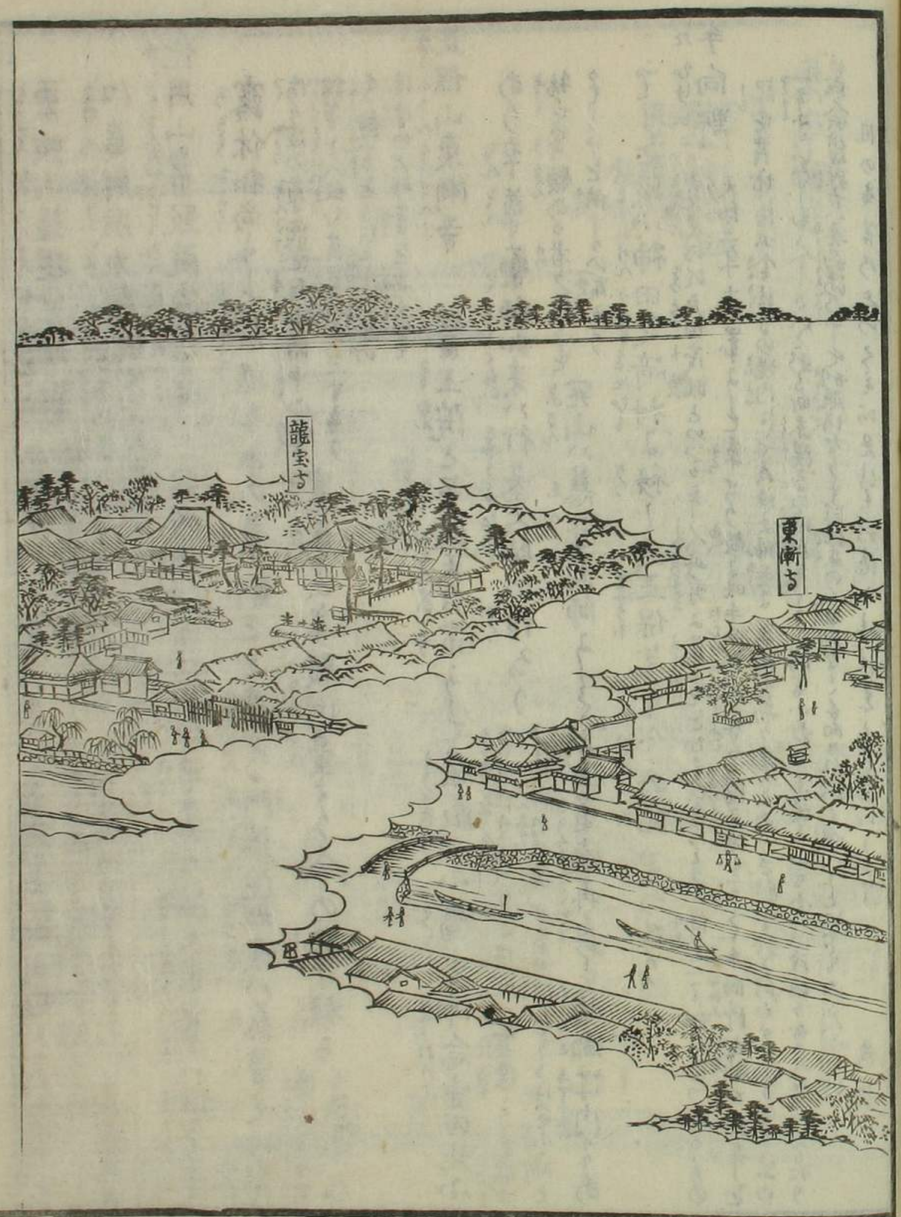

さゝくし
西福寺
塔中
中塔

新堀場

淨念寺

東漸寺

龍寶寺



東照大権現宮神影　神祖英よ　台徳公及び　慶雲尼公の御影をも奉祭せり

江島辯財天祠　當寺の信字こう幸そら画像にして弘法大師の筆なりといふ當寺第三世
　　其よ三軸あり毎歳四月十七日仏祭禮のとき諸人よ伴ちむ
　　称誉上人感徳あてこゝに安置する

化用山常照院浄念寺　同所西福寺の北の通りあり　浄土宗冠山性誉上人

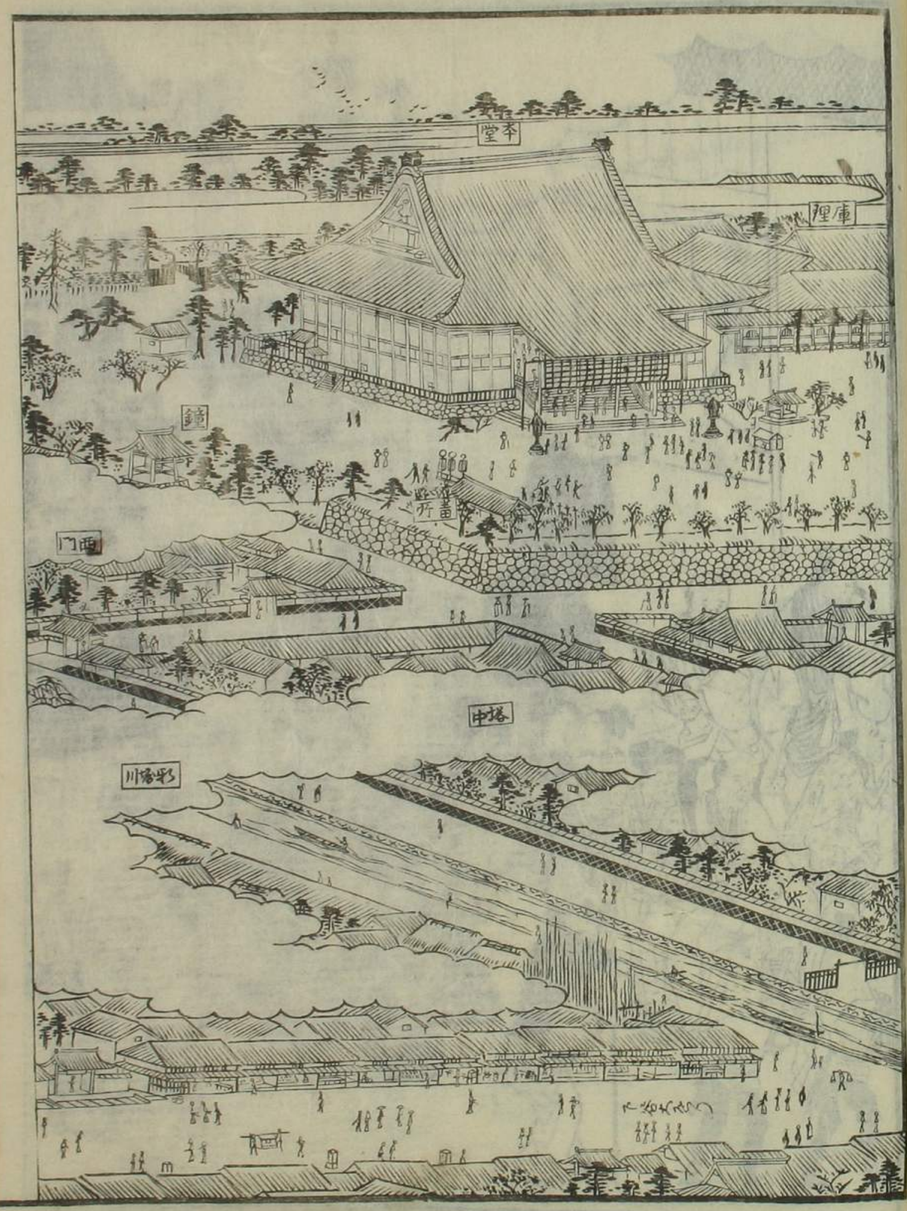
露休和尚のこと永禄年中の草創とて本尊阿弥陀如来い慈覚大師の彫
　作り収の尊像と称せ胎中小鑿　寛永十二年駿河臺より今の地ふ移る　境内ふ慈覚
　鋸等を入収む其長二尺三寸ろり　　大師の像乃
　　観音ちょう土中出現の
　　後唐の天神等を安置せ

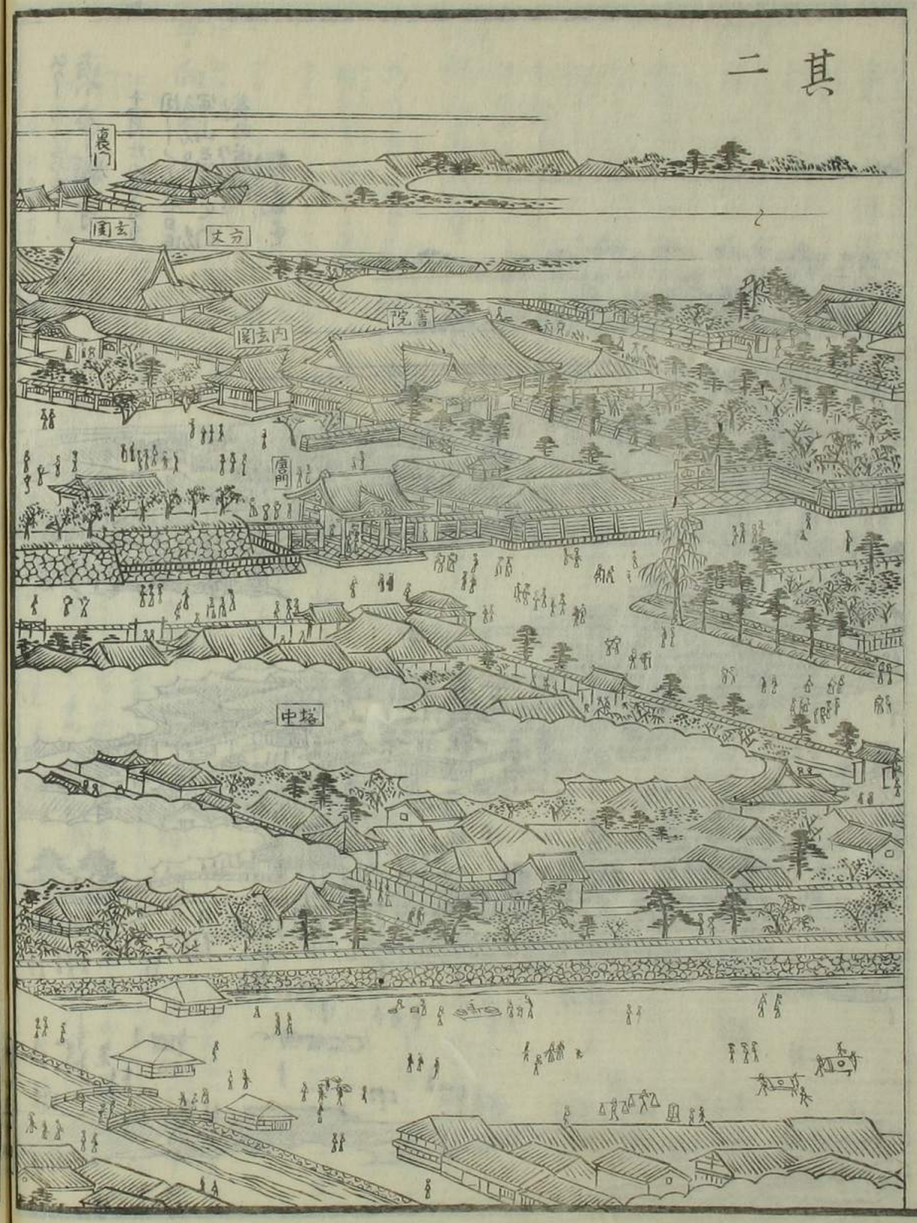
正保山東衛寺　毀酉王院と号し天台宗にして東叡山ふ屬せ浄念寺の北ふ
あり本尊薬師如来ハ行基大師の作ろり　書写性空上人常ふ獲持の霊像にして脇士
　　小十二神ねの像と並世伝ふ薬師と
　　称せ寄願ある者ろ祈るせ　冠山ハ慈覚大師ろく古田道潅再興せ始御堂内ろあ
　　くしけを供するの所ろり

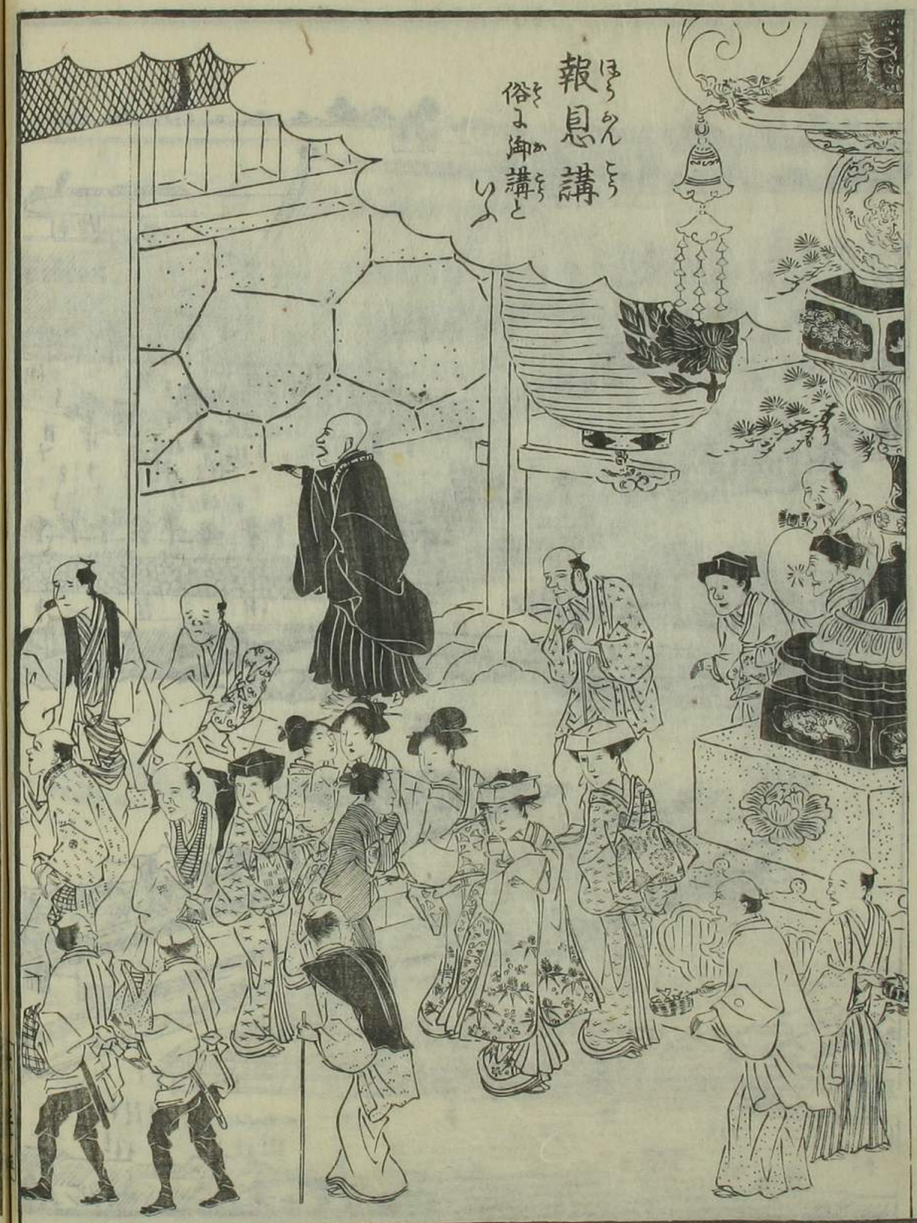
てしを後ふ神田芝崎村より移しに又正保年中今の地へうつせり

手向野　寛文の比戸田茂睡といふる方人此所ふ草庵をむすびろく住せ一ふ伊右衛門
　　天和二年十八軒のこと本せろ故ふ此手向野ふ茅を傍ふ碑を立く手向野と彫て和歌を
　　記せ其地八同石金殺生の境内ほして成睡夫婦墓さ一子伊右衛門墓さへりさ八金殺生ふ
　　一本ふ植ゆ〜ゑ〜と彫る町赤陽るの境内ふ諸書ふ載せ赤陽るふも今八此成睡ろ墓さ人石碑にえりたり
　　或人云ふ現在古八奥羽満行ふて所跡場なりと云ふ碑某の人番地なと多面ふ八ふ成睡ろ墓ふ
　　風の表若乃ちろくそふの先ほもちは絶ぬ法是ふ四ふいしを

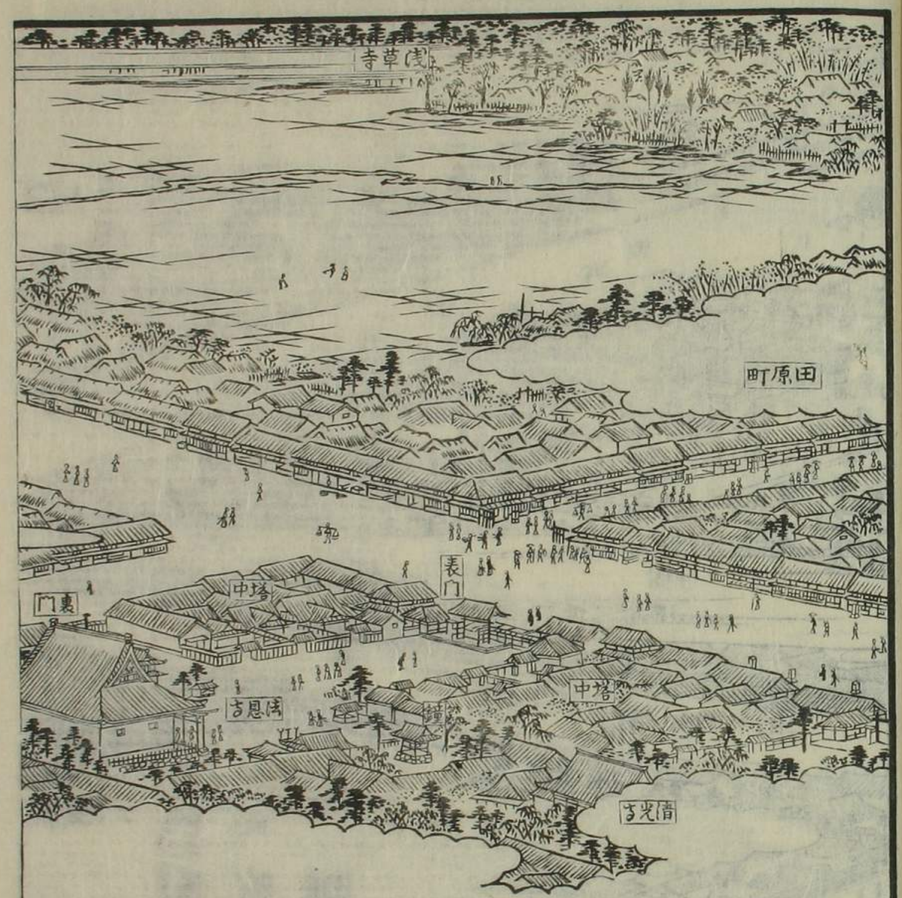
茂睡


本堂
庫理
鐘
西門
中塔
川幡彫


其二
裏門
玄関
方丈
書院
玄関門
鳳凰
中塔


報息講
俗よ御講と
いふ

平等
うり
にさせる
そしや
霜月
西山宗因



報恩寺

東本願寺

新堀端大通ふあり冗山教如上人其先本山の住職たりしを豊臣家のをかゝひとなりて順如上人教如上人の舎弟を本寺の門跡ふ定めら也教如上人ふ故るゝ退隠ちゝめ裏屋舗ふ至れりを世故ふ東門師と裏方といつる神祖竟ふ召出され冗祖上人の真影を御寄附ありて六条室町の未まで新ふ御堂屋舗ふ賜る夫より後東西といつる其後江戸ふ未寺建立あり京中一ヶ所建くく京都よりの輪番所とゐりいや中の門徒を勧化す依く則神田ふくまれを領す其人十日平稽の外加賀百敷と唱る所こ四番の後今の地ふ移されり

砌猿館とゐる

五花會毎年七月七日真行寺ふ集詰のくよ物を詩せ冗山忌毎年十月廿二日より同廿八日まゝくの間續花説法等あり僧ふ是を御講と称す

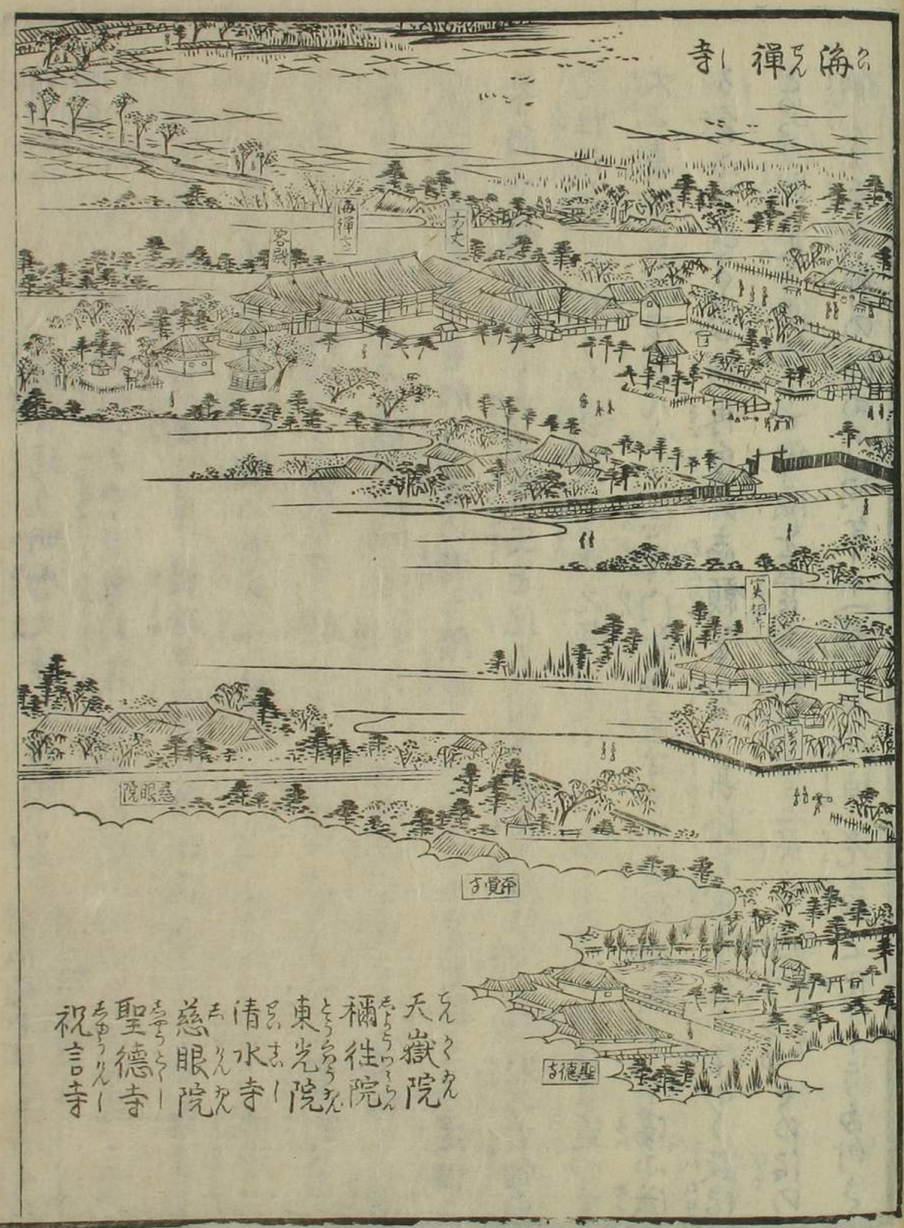
門徒の貴賤群参せり

高龍山報恩寺　謝徳院と号ふ東本願寺の東ふ隣る一向派ふして宗祖上人の遺跡二十四輩所の随一なり当寺ふ徳川豊田の左横曽根ふ有ふ数十世後結城の城主七郎左衛門晴朝の臣安賀谷何某といつる者の為ふ寺領田宅等を押領ちゝを終り武刃ふ移る様

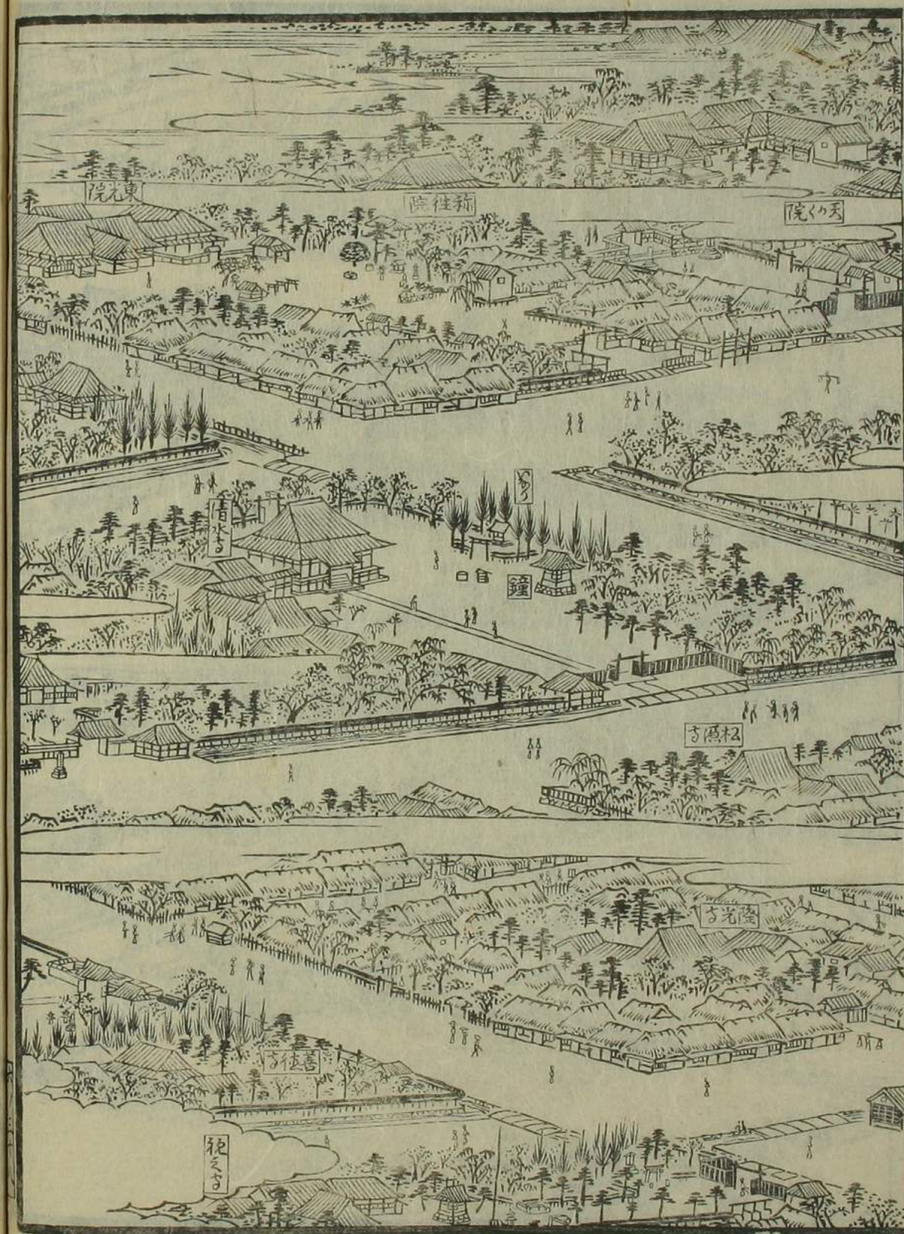
方丈
中塔
東門
中塔
正定寺

方丈
中塔
中塔
東門
誓願寺
日淪寺

海禅寺



天嶽院
禰往院
東光院
清水寺
慈眼院
聖徳寺
祝言寺



田小あり〻後八丁堀ゟ迄り明暦火後今の地ふるゟ舊地樫曾根ふとゝ也寺の
猶存り 冥山性信房俗姓ハ大中臣常陸鹿島郡の産〻幼名を與四郎とハ
天性多力勇悍心狼戾〻〻〻禮法を志らゝ唯漁猟殺生を事とするゝ
惡五郎とハ十八歳の春 紀の熊野山に詣〻〻歸るさ洛陽小ふり適東山
吉水ゟ戒ひ〻〻法然上人他力本願の旨を說あハを聆頭ゟ鬚髮を
薙て佛門ゟいゝんゟを願ハ依〻〻性信と名を授く夫ゟ寫師り隨
て晝夜側をさゝゝと師左遷の時も陪從〻て元二十五年を経〻り建保二
年師ゟ總ゟ往〻〻六ゟ群生を化を同國横曾根のゟ朽敗の古刹あ
を性信を〻て住〻む其後貞永元年竟小師の命小應〻彼地ゟ逗〻〻
大ゟ東冥を化度ちんと〻念佛門を弘通するゟ道俗充滿〻〻場小益
る〻ふをひ〻〻古刹再興の志願を企〻其地を求〻こふ沼あり飯沼
といつり則是を堙埋〻て佛閣を營〻報恩寺と号〻と 側當まの 權輿〻り
側〻り天滿神の祠あり同年十一月七日此神老翁と化〻〻〻

尚門の金剛力士等〻足代りつゝ悪龍を伏中より踊出て寺の門を倒さんとせしを性信此鉢を見て傷を清し其夜伴の
輩を誘ひ往てこれを金剛力士の足代土に慢ちる師あり則性信彼す奴を得て悪龍を退けんとも強き悪龍
雲を呑て常の三倍の水中に入後の叛を證智比丘尼に問ふ時に其す釵自在に〻水中に入りて風
俄に吹小風恐〻く須臾して逆浪起て既に船を覆さんとす時に性信の尼あるを見て鹿島詣舟に乗
浪〻なれ彼す釵頭にあり尼是を浮て帰る是より後宇佐に蛇及の釵といふことを
あられ彼す釵頭にあり前の悪龍水中より

松風茶碓　上の石臼に樟の
茶入　唐楽のすんりう　袋は三重夢唐織　笈　細代にて製せし性信坊の像不動とかく其余国扇帷四〻の力雄刻の
田島山誓願寺　妓楽院と号く東牟願寺の北にあり浄土宗江戸四ケ寺の一
室にして冥山に見蓮社東誉上人始り牟る弥陀如来は安阿弥の作にて
世に歯吹如来と称す傳云往古建仁三年十二月廿八日元祖円光大師室に
在して集會念佛の時金像の弥陀尊佛堂の扉障に映現して頂更にして
没を大師感嘆して乃佛に安阿弥に命して彼尊容を写し御長三尺に
彫刻す〻む自冥眼あるて常に持念し給ふ国三年十月十九日彼の像恍
然として口を開き音を發して親しく大師に十念を授ぬ示未面に逐
小啓歯微露し息を吹語を發するの状に髣髴時の人称して歯吹
の尊像と云　はまひるの上人語燈録に明遍僧都の伝状等に

智上人　縁起に小松内府重盛の子備中守平朝臣師盛の息女とあり　貞應の
行化伝に浄智上人は洛陽智恩寺第二世とあり
ちゝめ高野山に常行念佛の道場を創起して蓮華三昧院と号く
彼の像を傳持して牟ると竟に安永の末故ありて小移しなる
ところとて
当寺往昔相州小田原にありしを天正十八年　台命に依て當国に
ほさる礼文禄元年牟根町壹丁目にとゞまり始て寺地を賜ふ又慶長のころ
神田須田町に移され明暦の火後浅草に移し寺地を賜ふ元禄中用誉龍
岳上人國命と蒙て常紫衣を賜る亦末世降檀林の中より住職す則
當寺の規摸とす
神田山日輪寺　芝崎道場と号を誓願寺の北の方にあり牟尊阿弥陀
如来は安阿弥の作にて当寺は時宗にして當国弘法最初の道場とす　相州鎌沢
清浄光寺に属す　冥山真教坊は一遍上人第二世にして往古諸国遊化の頃当国豊
嶋郡芝崎村にあり　神田明神是なり今の神田橋御門の辺舊名を芝崎村とい其

傍に一宇の草庵を結び芝崎道場と号す（当寺の権輿）其後おまくの星霜を
経て慶長年中神田明神の殿宇を造営され当寺の柳原のほとゝ地を
賜ひ又明暦の頃今の地に移る（寺伝云く往古よりの由緒よりて今も開年九月十五日神田明神祭礼執行の時は当寺より上人以下衆僧を社頭に召して誦経念仏等種々の後法あり後神輿を渡御なさるゝを恒例とする今に至るまで連々なり）
頭に召して誦経念仏等種々の後法あり後神輿を渡御なさるゝを恒例とする今に至るまで連々なり
光明山天嶽院　遍照寺と号す日輪寺の西に隣る浄社の法嵐寺にて天正
年中善空上人草創なり開山は圓蓮社満誉上人と号す本尊手嶋観世
音菩薩は唐仏にて順徳帝建保年中相州鎌倉鶴岡の社僧良真傍都
入宋の時音王山能仁寺より将来せる像なり〻と其後豊臣関の幕下
津田勝重といふる者此像を感得せ息元重伊賀国千島と云所に移す頃此
霊像の告によりて群賊の蜂起を治め武威を国中に振ひ出依人民伏して
千島殿と称せ其後元重當国に越さ〻頃故ありて當寺に収む則寺
内に千島元重の墳墓あり當寺舊は俄草橋のうちにあり〻明暦
田禄の後此地に移る

一心山禰往院　同西に隣る捨世寺と号せ浄土宗にて本尊阿弥陀
如来は丈六の座像にて恵心僧都の作なり脇に観音勢至の二菩薩を
安置す冠山は幡蓮社白誉称往上人（姓は飯田氏下野の野州宇津宮の人なり）當寺昔は小田原
にあり〻〻慶長年中當国へ移され湯島に地を賜ひ後復今の地に
引き〻り捨世一流常行念仏の道場にて殊勝なり（當寺に田光大師月影の御影あり）
薬王山東光院　同西に隣る医王寺と号せ天台にて東叡山に屬す本
尊瑠璃光如来の像は仏工春日の作なり伝云慈覚大師當寺を草創
あり〻〻とて往古は顕密二教ともに弘まれて台宗一百八箇寺の總本寺たり
中古本因道灌此霊像を崇敬〻〻堂の鬼門に置又其後慶長年中日光
御門主一品尊敬法親王山門より動寺の松林坊賢海法印に仰て再興已
む
神祖其時院主に命ありて仏像長久の御祈禱として正五九月に大般若経転
讀せ〻めらる（此例今に至るまで恒例なり慶長の頃近所常盤橋の北にあり其後小傳馬町に移る其地をさして今も往来師堂おとり俄草の地と寺を移せり明暦田禄の後なり）

建長二年の秋
性信坊義想ろ
しかくくんあり過去
生の枯骨の不在と
ろ奥州信夫郡
土湯山よりよりよ一の
猟人あり師云く
此松ひよ我過去生の
枯骨あり汝
是を埋ろ
得させへしと
猟人云く
我業を
みさくれい
明日の糧
ゆ〜とく
さくふ貴の
を依く性
信坊猟者ろ

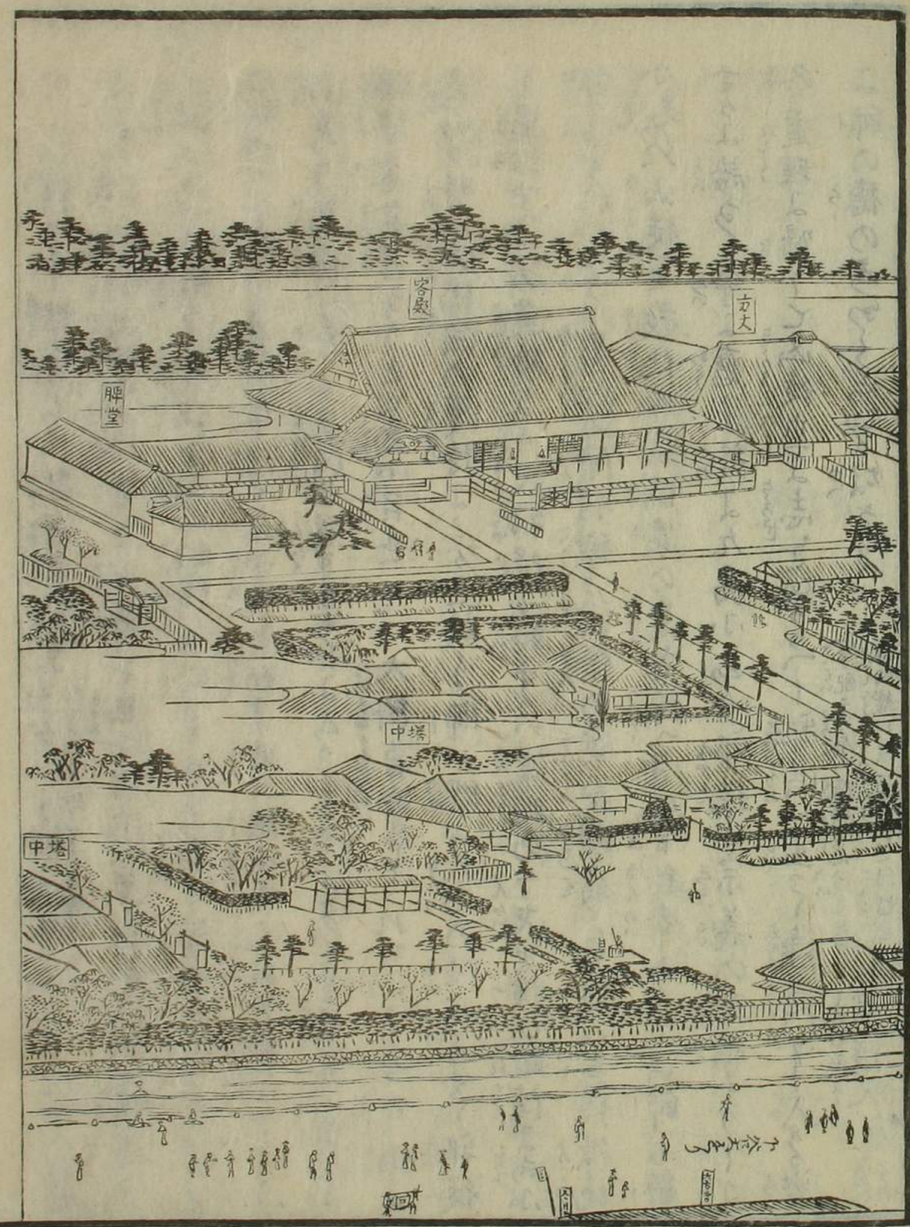
特ところの
弓箭をとろと
石上よ投すれい
其箭をのれと
發〜一鹿を射〜ろ
師則是をあくの
猟人驚るひく其れ
あくさろを借り来て
松ひを穿ち既あくく
枯骨を得りれい性
信坊歓喜踊躍〜
意ろよ其地を刊〜て
一の精金と骨ろ
号けく法得寺
といいひろ

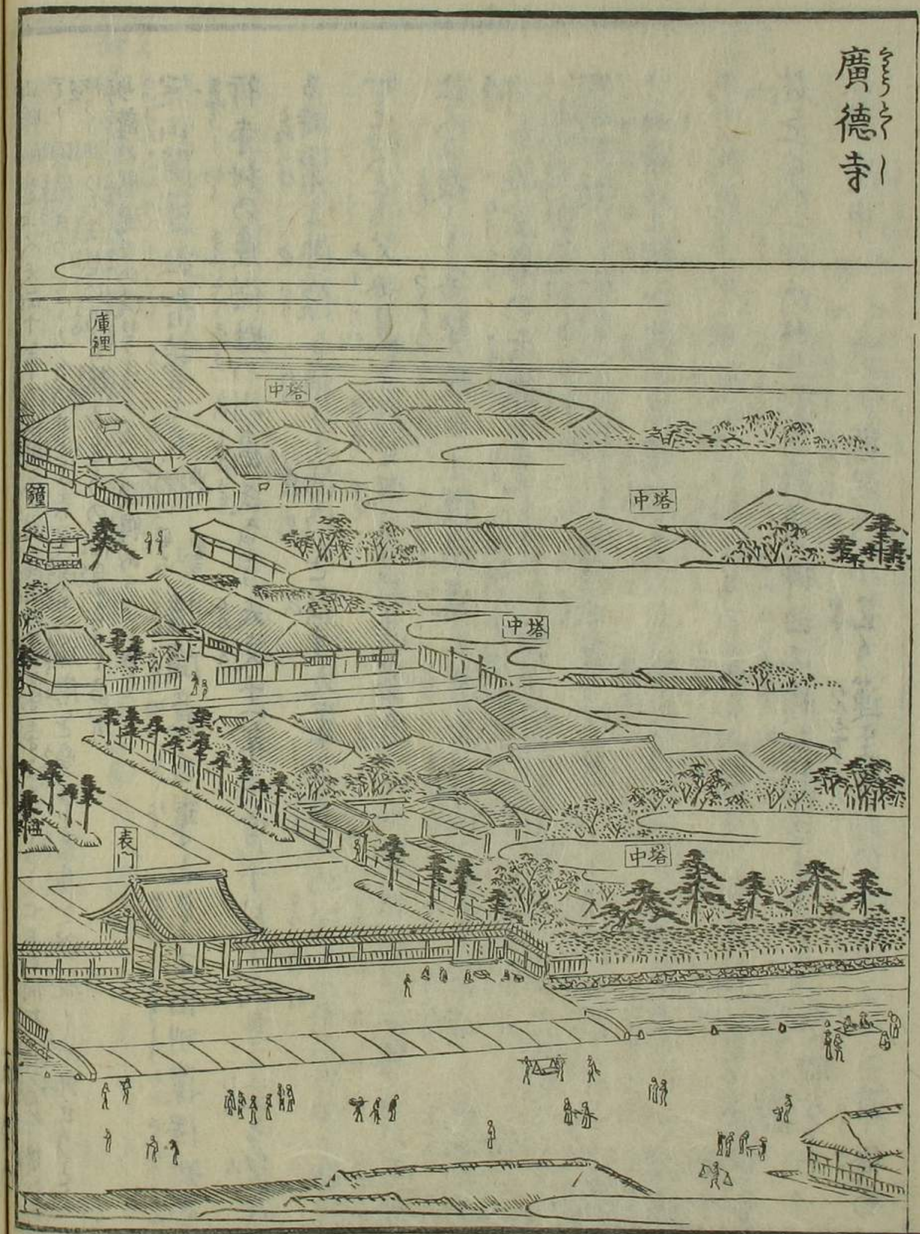
大雄山海禅寺　同所新堀の小川を隔て西の方よりあり　臨済寺派の禅宗
にて江戸四箇寺の一なり往古平親王將門總州相馬郡よりあつく草創
する所の佛刹なりされと將門亡るの後年を歴て荒廢よりてひさしく狐
鬼の栖となりしを慶長の頃覺印和尚再興して寺を江府湯島の地小
移せり其頃
神祖和尚の道德を軍しめ尊敬あらせられしより後小寺院も輪奐と
して宗流殊に盛なり　明暦回禄の後今の替地に迂されぬ
清水寺　觀世音菩薩　海禅寺の向の新堀端にあり黄門淺草橋の内にあ
りしを明暦火後今の地にうつされる寺を江北山清水寺と号し天長年中
慈覺大師ひとつの勝地を求め天台法流の一院を建立ありてこれかく
一の三禮なして千手大悲の像を作り安置せるとて其昔の佛閣甍を
連ねたりしに年去年来に星霜を歴るに堂塔ともに破壞せ
しを文禄年間慶圓法印とのいる沙門霊告夢得て敵山正覺坊の探題

豪威僧正と相謀て堂宇を修營し昔に復せしむ
上宮太子堂　同所北を下たり坤の方にあり寺を用明山聖德寺と号す
浄土宗にして本尊聖德太子像は御自作なりとつ世に孝養の御影と称
天皇御悩の時太子神明佛陀に祈誓したまふ往古御父用明
平愈給ふ御年十六歳の御影像なりとて往古聖實
上人念佛弘通の為此霊像を守護奉りて冥東に下て坪根澤に一宇の
精舍を建立せ又は馬沢に作る御堂内に其後享德二年忠蓮社加誉上人良
祐和尚中興して台宗を改めて浄家となる慶長の頃馬喰町馬場の辺小
移され明暦の後今の地に引移せり當寺門の内に地藏尊の石像あ
り相傳一澤本誉禅誓上人の作なりて當山十七世の住侶霊告夢に土中を穿地掘る
に全躰を補造せり其芽面に件の旨趣を鐫す
の御首を得て仏に石工に命じて
除厄地蔵堂　同所北の方浄土宗天竺山慈眼院に安置せる德地蔵四十
二軍の御時除厄の為自彫刻しまひし霊像なりとつ當寺昔は神田
明暦回禄の時本堂を失ひ依住僧德誉上人深く是を悲み竟に霊告を
得て忍びなる地の中島に此本堂を感得して再ひ安置せりとつ
萬年山視言寺　同所南の方通を隔て西南の方にあり曹洞派の禅宗

まゝ良山奈久和尚冠山たり往古は戸澤の辺視言村といふよありく天
文二十年の頃古因道灌草創也天正の頃山号を賜ひ又此地に迁さる
日蓮大菩薩　因所新寺町より半丁ばかり西南の方にあり安立山長遠寺
小安置す伝云往古花洛南禅寺の普門禅師寿年日天子を信弘〳〵
一朝日輪の中に二菩薩の尊影を拜を依て自筆をとゝく親見を摸
〳〵奉ら霊告によつゝ弘長元年辛酉六月迄に冥東より豆州伊
東小ゟり因六日日蓮上人に謁〳〵彼二尊の慈眼を乞求む則上人冥眼
供糧あつゝ花押を添らる又禅師深上人の徳澤を慕ひなう大士
自肖像を造ゝ禅師のもとに贈らる　蒙寺日蓮大士の像是なり　禅師帰寂の後京
師要法寺より〳〵又妙栄寺に安置ちゝかあつゝ文禄三年の
頃当寺に迁ちり
神因山幡隨意院　新知恩寺と号す浄家十八檀林の一室にゝ本堂の左にあり傍に碑
尊阿弥陀如来の安阿弥の作なり　妙龍水

山幡隨意上人天正十年の秋越後國高田の善導寺に〳〵一七日の間別時念佛修行の
依〳〵其のち法恩のあり様ゝ所ゝ浄土の脇譜を受ゝ畜生を解脱〳〵成佛ちりとて
妙龍の則龍女の法ちりて上人授與あつ〳〵
冠山隕蓮社智嶮上人　猪の号の典　誉　幡隨意白導と号す相州藤澤郷善
行寺村の産俗姓の川島氏なり天文十一年壬寅十月十五日に生る兒に
る時常に佛像を禮〳〵沙門を殺す九年に及の頃出家ちんゝをのそ
むとゝも父母是を許を既すして十一年竟小因國玉縄邑二傳寺の乾誉
上人に投ゝ落髪授戒〳〵幡隨意と号す爾来所〳〵を経歴〳〵数田の年
序を経宗要の玄微を究む　天正年中上の州館林の刺史藤原東政の請によりて彼地に一山寺を創し後南山善導寺と号す十八檀林の一なり又
越後國高田の善導寺に兄基ちり　慶長七年壬寅　第六　洛陽知恩院に住職
す此時紫服を賜ゝり鳳闕に登ゝ浄家の秘蹟を講を主上大に感
あり因九年甲辰東武の招によりて再び此地に向〳〵神田の臺小墾し
地をめ〳〵一宇の梵刹を闢ゝ神田山新知恩寺と号す　暦の頃迁地の陽にあり因十
三年庚申　歳六十七　武州熊谷邑小に蓮生法師の遺跡に小き草庵あ


中塔
中塔


廣德寺
庫裡
中塔
中塔
中塔
表門
中塔

ゝを轉〻〻精舍とし勉谷寺と号（台命によりて金襴の袈裟を賜ひ寺領等を附せらる）同十六年
辛亥（歳七十）勢州山田小入門寺を開基を始め同十八年癸巳（歳七十二）蠻夷の
凶賊九州小發し邪法を弘め幻術を以て人を惑し頗国を傾んとする
の兆ありされども是を平治す小于戈を動す時い国中の人民を慶ぶ
又少り高僧小命し正法を導しめむよろしふを以て衆義一変し
幡隨意其器なりと直小召し　大樹自命ありて云く吾軍国を
患ある時い必佛法の護持なるといり師ハ既に天下の法将なり邪従
を退治すへ元の英雄なり又邪従小對する軍将の干戈を揮ひ敵陳に向ふ
等〻れいとく蜀江の陳羽織及ひ金の軍配團扇とを賜ひ急ぎ彼地
小赴き凶徒を教化ちめ国家の患を除へきの旨釣命ありしか師も辭
する事を語ゑく命に應し終に九州小ゑり邪徒と宗義の討論ありしに
各道理に帰し凶徒亦に志をひるへし邪法を出て浄土門に入る實
に師の德のちめ〻志なるへし

其後又

命によりかゝとに梵宇を創立し観音寺と号す（有馬氏越前国九岡に移る今の二河山白蓮寺是なり）其
後崎陽小ゑり大音寺を開き竟に晩年に至ひ紀州和平山に於て萬
松寺を建立し〻に住ちれし一日微疾を示と上足意天和尚（保川雲巖寺）
二世かゝとに至り師の病床を訪ふ師大に喜ひ傳燈の法主たるへしと委〻
傳法あり且諸弟に教誡し遂に寂床に坐し筆を求め辞世の偈を書
し云く白道運歩数十年以此消此難思術と書畢て筆を擲端坐
合掌し高聲に弥陀の名号を唱へ眠り如くして化を映ふ元
和元年乙卯正月十五日歳寿七十四（以上行化傳の要を摘）
信州善光寺燈明　寺所赤城山燈明寺と云る台宗の寺なり有ひの
輩是をうく寺内に赤城明神を鎮ゑり
朝日山永昌寺　願成院と号し下谷大通にあり浄土宗にて鎮蓮社尊誉上人
を開祖とし本尊阿弥陀如来い運慶の作千に観音い慈恵大師の作とそ
世に除元の〻〻寺傳に云當寺い天正年間下谷長者某草創とり又因所長者

下谷稲荷明神社

所となるよあり也を元和の頃今の地より引うつりとて明暦二年丙申松浦家の
母儀永昌院再興あり也とあり則境内より長者の墳墓あり

圓満山廣德寺　同所よりあり大德寺流の禪宗にて始相州小田原
にありしを天正十九年江戸より迁され神田にて地を賜ひ事跡合考小昌
寺の堂宇を建たりと其後近の堂さ目黒橋の内よりうつり其後寛永の末今の地より迁る元
山を希叟宗芳禪師といふ
當寺の總門の名匾の美なるを見近風光の難あるよをうふといとも恙なく最当面の親
和とする所あり詳よ橘曉主人の新説夜話といふる草紙より出たり

下谷稲荷社　廣德寺の南の側よりあり故よ俗唱て廣德寺の稲荷と称と
是大なる誤なり別當を正法院といふ祭神の蒼稲魂命にて本地十一
面観世音の行基大士彫刻の霊像なりとて中の鳥井小正一位稲荷大
明神と書る額あり崇保院公寛法親王の真蹟なり拜殿よ掲る
同神号の額の蓮花光院道恕の筆なり當社祭礼ら構年三月
十一日よ執行す下谷の鎮守と称と